

---

# **守護霊（ガーディアン）と討手（ハンター）**

泉海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
ガーディアン・ハンター  
守護霊と討手

【Zコード】

Z8869M

【作者名】

泉海斗

【あらすじ】

蒼陽学園高等学校2年の神崎佑介は妹愛華との2人暮らし。ある日突如として現れた怪物・・・悪霊。そんな悪霊たちに佑介と守護霊となつた妹愛華がともに戦つといふ物語。

そして佑介の恋の行方は? 愛華の恋は?

## ターゲット① とある人生の終わりと新たな人生 上(前書き)

いつもの平凡な日常を過ごしていた佑介と愛華。  
楽しい学校生活が待っているはずだったのに・・・。

## ターゲット〇 とある人生の終わりと新たな人生 上

俺の名前は神崎佑介。蒼陽学園高等学校2年生だ。今日は入学式。俺には1つ下の神崎藍華という妹がいる。素直でかわいい妹だ。このまま育つてくれれば兄としては鼻が高い。親は共働きで外交関係のためほとんど家にはおらず、つまり今まで妹と2人だけで生活してきたのだった。少々ブラコン気味なのは嬉しいのやら困るのやら・・・。そんな妹が今日ここに蒼陽学園高等学校入学するのだ。

「お兄ちゃん、早く行こうよ」

「なんで、まだ7時じゃないか。俺がいつも出るのは7時30分だろ」

「早く行つてお兄ちゃんとゆつくり通学路を見たいんだよ  
まったく、どこに行くにも兄である俺にくつづいてくる。時とし  
ては困ることもあった。離れれば自分の支えがなくなるとでも思つ  
てるのだろう。早く妹を支えてくれる男が来ればいいのだが・・・。  
それでもちら男にだけは渡したくなかった。

「はいはい、わかつたよ」

そうは言つもののあしらつことは俺にはできなかつた。

「よかつた」

につこりと笑う妹その笑顔を見られののなら俺はなんでもできる・  
・ん? これじゃあシスコンじゃないのか? そうして俺は哀歌から手  
作り弁当(本人曰く、愛妻弁当)を受け取つて一緒に登校した。こ  
れが最後の妹との人間同士の日常になるとは思わなかつた・・・。

ターゲット〇 とある人生の終わりと新たな人生 上(後書き)

感想&評価お待ちしています。

ターゲット1 とある人生の終わりと新たな人生 中（前書き）

なぞの人物登場。

## ターゲット1 とある人生の終わりと新たな人生 中

かつ かつ かつ 2人のそろつた足音が聞こえる。知らない人たちから見たら俺達はたぶん恋人同士に見えるんじゃないかなってくらい近かった。藍華は無意識なのだろうが兄としては嬉んだがそろそろ兄離れをして欲しいとも思う。かといって自分には彼女がないのがつらい。哀歌に何人もの男子生徒が告白したが見事に撃沈させられてきた。フラグは乱立しているにもかかわらず、すべて排除してきたのだつた。兄としては売れ死んだが、男としては断られた生徒たちに同情するし、申し訳なく思う。人間としてはどうしてそんなにもフラグがたつかが分からず、軽い嫉妬ももつていたりする。（俺も顔は悪くないと思うんだけどな・・・）

そう言って自己陶酔に入る。しかしそんなボーッとできる時間を登校時間において藍華は与えてくれない。常に自分と話をして欲しいのだそうだ。こっちだつて少しばーっとしたいんだよ我がシスター・・・。でもなんだかんだいって俺も律儀に話しにのつかつてやつている。途中近所の人たちに挨拶し（何回かまるでカツブルみたいだね）と冷やかされた。藍華は満足そうだったが・・・、ようやく学校に着いた。

「わー。きれいだねー」

学校の回り一体には桜が植えられており、そのすべてが開花していた。まるで今日の入学式を祝福してくれているかのように・・・。藍華はそんな桜に興奮したのか走り回っている。

「走つて転ぶなよ！」

「分かってる！」

本当に分かってるのかね・・・。俺は近くのベンチに腰掛けて桜を眺めていた。風が葺くと桜が飛ばされひらひらと舞つていた。

「今日は最高の式になるな・・・」

それはちゃんと親が来ていればなおさらなのに・・・。仕事が忙し

くて行くことができないと今朝方親たちから電話が来た。愛かもこれないことを聞いたときには少し残念そうだった……。

「バカ親が……」

今まで俺達の行事に参加してくれたことは一度もなかつた。学校からも何度も着てくれるように行つていただが……結局着てくれなかつた。それも仕事が忙しいから……。結局俺達よりも仕事のほうが大切なのだろう……。そんな親なのだから……。仕方がない、割り切ろう……ふと俺が顔を上げると目の前には同じ学校の女子生徒が立つていた。

「生徒会長?」

前にいたのは生徒会長吉川深夏さんだつた。剣道の道場を開いている家で育つたため、剣道部にも所属していた。髪は黒く、長い。スタイル抜群で、学園のアイドルだつた。それよりも生徒会そのものがアイドル集団的存在だつた。それも人気投票だつたためみんな女子生徒だつた(そんなのでいいのかよ……。ちなみに俺も参加したつておい)。

「かわいらしい子ね。新入生? それとも……彼女?」

「妹です。今日ここに入学するのでよろしくしてやつてください。」

神崎愛華つて言うんです。俺は……

「2年A組神崎佑介くんでしょう? あなたのことはよくうわさで聞くのよね」

「うわさですか? (やつたついに俺にも春が来るのかー) 「

「ええ……極度のシスコン生徒だつて」

「ええ……俺は見事に転んでしまつた。顔が痛い……。」

「あ……あの、俺は確かに妹といつもいますけれども消して俺がシスコンなのではなく、愛華のほうがブランコンなんです」

「あらそうなの?ごめんなさいね」

「いいえ、大丈夫です(絶対面白がつてたな……)」

「そもそもほかに生徒たちや保護者の方々が来る頃ね」

「ああ、やつですね。もうこんな時間か？。おーい愛華そろそろ中に入るぞー」

「はーい」

相当遠くまで走って行つたなあいつ・・・。

「くすくす、元気な妹さんね。うらやましいわ

「あいつは元気が取柄ですからね」

「それじゃあ、あなたもしっかりと式を成功させるのよ

「分かりました」

「それと・・・氣を付けて・・・」

「？」

そう言つて生徒会長は学校に入つていった。俺は最後の氣をつける  
よつこに言われたことの意味がまったく分からなかつた。

## ターゲット1 とある人生の終わりと新たな人生 中（後書き）

皆さんからの感想＆評価お待ちしております。

## ターゲット2 とある人生の終わりと新たな人生 ？（前書き）

さよなら俺達の日常・・・。  
よひこそ俺達の非日常・・・。

## ターゲット2 とある人生の終わりと新たな人生 ？

その後の入学式は滞りなく無事に済んだ。生徒会長しつかりとしたスピーチすごかつたな～。

そんなわけで俺と愛華は現在帰宅途中。そんな愛華は式の後でホームルームでたくさんの友達を作り、暮らすみんなから早速買つたばかりの携帯でアドレスなどを交換したらしい。笑顔がまぶしかった。

「それでねそれでね・・・」

よほど嬉しかったのだろう。できた友達について色々と教えてくれた。男友達もできたらしい。藍かもそろそろ恋人を作ればいいのにと思う兄であるが、俺もそろそろ作らなければ置いてかれてしまう。笑つたり、突然落ち込んだり、泣きそうになつたりと色々表情を変えていたためか心配そうに愛華が覗き込んできた。

「お兄ちゃん、体調悪いの？」

「そんなことない、お兄ちゃんにも色々あるからそれで色々考えていたんだ」

「それならよかつた。それでね・・・」

延々と続けられる妹による報告。そろそろ勘弁してくれと思つたとき・・・。そう・・・。このときに俺達は日常の世界から足を踏み外したのだ・・・。もう戻れない非日常の世界に足を踏み入れてしまつたのだ・・・。

ずしーん　ずしーん　田の前から巨大な怪物が現れた。腹から鎖みたいのがたれています。ぶつちや毛やばいんじゃないですか？

「お・・お兄ちゃん・・・」

すっかりおびえてしまつた愛かは腰が抜けたのかへたり込んでしまつていた。

「おい、逃げるぞー！」俺は哀歌の腕をつかんでもと来た道を走り始

める。それを見た怪物もまた、俺達に向かつて向かつてきた。つい  
うかなんで周りの人たちは気づかないの……て誰もいね～。な  
ぜかいつもなら人が歩いていてもおかしくない時間帯なのに誰も歩  
いていなかつたのである。

「「はあ・・はあ・・はあ・・」

俺達はただひたすらの学校に向かつて逃げていた。なぜ学校かは分  
からないが自分でも分からぬが、なんとなく学校が安全だという  
勘が働いたのだ。逃げる途中も誰とも会わなかつた。そんな状況  
を愛かも顔面蒼白で走つていた。

「よし・・ここまで来れば・・」

突如俺の腕が軽くなつた。見ると肘から先がなくなつっていた・・・。  
愛華とともに・・・。

「うわ――」

あまりの激痛に俺は悶絶する。遠くの桜の木下には俺の失った腕と  
愛かがいた。愛華も頭から血を流して、危険な状態だった。  
「ぐ・・・ぐそー・・・。なんなんだこいつは・・・」

目の前のは口からよだれを駄々流しにした怪物が1体。今にも俺に  
襲おうとしていた。

「お・・・お兄ちゃん・・・」

愛華が弱弱しい声で歩いてきたのだ。

「バカ！何でこっちに来たんだ！さつさと学校に逃げ込めばよかつ  
たのに！」

「お兄ちゃんを置いていけないよー」

「こんなときぐらい自分を大事にしきよーお兄ちゃんじこじことを  
させてくれよ！」

「お兄ちゃんがいなくなつたら私・・・私・・・」

鋭いつめを持つた腕が俺に向かつて振り下ろされた・・・。

「おにいちゃんがいなくなつたら私、支えてくれる人がいなくなつ  
ちゃう！そんなの嫌だよ！」

そう叫んだ愛華は俺のことを突き飛ばした・・・。ツキトバシタ・・・

。

グシュウウウウ　ブシュアアアアアア

目の前で血が噴水のように噴き出していた。赤い水・・・血・・・

愛華の血・・・。

「ああ・・ああ・・・」

俺は言葉にならぬうめき声を上げた。目の前には腹から深々と引き裂かれた妹の変わり果てた姿があった。愛華は・・・俺をかばつた・・・何で？

「なんで俺なんかをかばつたんだ！！」

俺は叫んだ。愛華は弱弱しく言葉を漏らす・・・。

「私がお兄ちゃんを誰よりも愛していただよ・・・」「そんな・・・そんなことがあつていいのか？俺のせいいか・・・？俺が愛華を殺したのか・・・？」

「逃げて・・・お兄ちゃん・・・」

俺は愛華に何もしてあげられなかつた・・・。助けることもできなかつた・・・。いつもそうだ・・・。愛華がいつも俺に笑顔をくれたから俺はいつも楽しかつた。けしてシスコンではないが・・・これは兄として当然だろ・・・？でも兄である俺からは何も与えてあげられなかつた。与えられてばかりだ・・・。俺は近くの木の棒を持つと怪物に向かつて構えをとる。まったくの素人・・・。足は恐怖で震え、手も震えていた。まったく情けない・・・。

「お前のせいで愛華はこんなにも傷ついたじゃねえか――」  
俺は叫びながら怪物に突つ込む。するとわき腹を何か硬いもので思いつきり殴られて吹っ飛ばされた。ものすごく痛い。吐きそつだ。

「だ・・誰だ・・・」

前を見るとそこには日本刀を持った生徒会長吉川琴美が立っていた。  
「『めんなさい、神崎くん。ほかの事件でここを離れていたの』  
そう言って刀を取り出した生徒会長は神速を生かし怪物に切りかかる。怪物はまったく姿を捕えられずただ切り刻まれるだけだった。  
そうして細切れになつた怪物は青白い炎に変わり、そうしていつ現

れたのか知らないが、宙に浮いた犬に食べられていた。

「あ・・ああ・・何なこのいつら。そんなことよりも愛華ーー！」

俺はすぐさま倒れている愛華の元にいった。もう生きているのが不思議なくらいだった。息も絶え絶え・・・素人の俺でももう助からないことは一目瞭然だった。俺の傍に来た生徒会長・・・。その表情は申し訳なさでいっぱいだった。

「すまない、神崎くん。私が誰かをここに置いておけばこんなことにはならなかつたのに・・・。本当にすまない」

頭を下げる生徒会長。しかし俺には何を言つてているのかが分からなかつた。

「生徒会長・・・謝られてもしようがないですよ・・・。愛華・・・何とかなりませんか！救急車を呼んで・・・」

「ごめんなさい！愛華ちゃんはもう助からないわ・・・」

やつぱり・・・。分かっていても認めたくなかった・・・。あきらめたらその場で愛華が死んでしまうと思つたからだ。

「そうですか・・・」

「愛華ちゃん・・・、私はあなたを殺してしまつたといつても過言はないわ・・・。あなたはまだお兄ちゃんと一緒にいたい？」

「ま・・・まだお兄ちゃんと・・・一緒にいられるの？？」

弱弱しく立つたが、その言葉にはわずかな希望がこめられていた。

「ええ、あなたがお兄ちゃんの腕となり守護霊となり、先ほどの怪物みたいなものと一緒に戦うの・・・。それでもいいならあなたをお兄ちゃんと一緒にいさせてあげられます」

「そんなことができるんですか？俺がここにつらと戦えば・・・」

「ええ、その和目にはもう日常生活はできないわ・・・。醜い戦いの世界に足を踏み入れなければいけないわ・・・。それでもいいならばやつてあげるわ」

「愛華はどうしたい？愛華とまだ一緒にいたいのか？俺は・・・俺は・・・。

「愛華は・・・愛華はまだお兄ちゃんと一緒にいたい・・・。お兄

ちゃんとがいるならほかには何もいらない・・・・。お兄ちゃんが傍にいてくれればいい・・・」

・選択肢はただ一つしかないだろ――！――

「お願いします！！愛華を俺の守護霊にしてください！！」

俺は深々と生徒会長に頭を下げた。会長は一瞬と惑つたが、納得した表情になった。

「分かつたわ、あなたたちが決めたことならば私は止めない。その代わり、神崎くんあなたには生徒会に入つてもらいます。詳しいことは明日生徒会室で話しますので今は何も聞かないでください」「すると会長はポケットから御札と黒い数珠を取り出した。御札を愛華に貼り付け、数珠を俺の失った右腕にのせた。激しい痛みを必死に我慢していた俺だが、さすがに傷口に物が載せられたときには悲鳴を上げてしまった。そんな時・・・。

『まつたくなんなのひ、この男は。深夏は両足失つても泣かなかつたのに腕一本でこうもピーピーと』

「ハク！――言はずぎだよ！――神崎くんは何も知らなかつたんだからいきなりでしようがないよ。それよりも始めます」

そうするといきなり回しが白い光で満たされた。

「これより契約するものの名は神崎佑介、守護霊たるものは神崎愛華。我吉川深夏、そしてその守護霊ハクを媒介として契約となせ――！」

辺りを包んでいた光はなくなり、俺の腕は元通りになつていた・・・

。 ただ、右手に刀があることを除いては・・・。

それに後ろには前に倒れていた哀歌が透明になつてふわふわと浮いていた。

「本当に幽霊になつちゃつたの？？」

「私お兄ちゃんの守護霊になつちゃつた」

「今日のところはここまでだ。詳しいことは明日の放課後生徒かいしつで説明する。われわれの仲間も紹介しよう。必ずその刀も持つ

てくるんだ。普段は守護霊に持たせておけばいい。守護霊は使えないけれどもな

「分かりました・・・。後愛華の死については・・・」

「それはわたしたちが愛華ちゃんが急に引っ越すことになつたことを伝えておきます。もちろん連絡はできますよ、今までどおり携帯で」

「それじゃあ、この刀以外は今までどおりの生活ができるのですか？」

「ええ、おなかも空くし、眠くもなるしね」

結局のところ、今日はここまで打ち切りになつた。まあ、これから俺の生活は一体どうなるんだ??

## ターゲット2 とある人生の終わりと新たな人生 ？（後書き）

感想＆評価お待ちしております。

ターゲット③ 生徒命の正体  
？（前書き）

非日常の生活が始まる。

## ターゲット③ 生徒会の正体 ？

非日常の出来事が起きてから翌朝。俺はいつもとおりに毎日をこしり、2階の部屋からリビングに降りた。リビングにはいつものように妹の愛華が朝食と弁当を作っていた。彼女の姿はかすかに透けていたのは、機能の戦いで悪霊に死を『えられたためであり、俺の守護霊になつたためであった。

『あ、お兄ちゃん。おはよう』

「ああ、おはよう。霊になつてもいつものように作ってくれるのか。ホントにありがとな」

『いいんだよ、私はお兄ちゃんがおいしそうに食べててくれるだけで幸せだから』

妹は屈託のない笑顔で言つ。彼女にも俺ではない別の男との付き合いもこれから的生活で見つけることができたかもしないのに・・・。昨日のことさえなければ・・・。俺があそこで・・・。

『お兄ちゃん？？何そんなく深刻な顔してるの？？まさか私が死んだことを自分のせいだと思つてる？？』

何で分かった？？お前はエスパーか？？

『私はおにいちゃんのことなら何でも知つてゐよ。伊達に16年一緒にいたわけじゃないんだから』

『そうか・・・。良かった・・・。これで最新までつながつてたら俺の考えることなんて全部丸分かりになつて、後々恐ろしいことになつてるからな・・・。

『ところで俺の刀は今どこに？？』

『私が持つてるよ。私が持つと見えなくなるらしいね。でも私はどこにあるのかちゃんと分かるから心配しなくていいよ』

俺は愛華から刀を受け取ると、広い庭に出て素振りを始めた。剣道なんてやつたことないからな・・・。あの後本屋によつて入門書を買って一応刀を通してみたものの、やはり一朝一夕ではできないか・

・・・俺はそれから朝食ができるまで延々と刀を振り続けた。昨日から違和感があつたが、もぎ取られて、契約で直つた右腕だけが今までの右腕とは何か違うものと感じられた。まあ・・・今日の放課後にでも分かるだろう・・・あの生徒会長なら何か知ってるだろう。俺はそう簡単に高をくくっていた。それから朝食をとり、いつもの時間に学校へ出発した。もちろん守護霊の愛華も一緒に刀を持つて。昨日と同じ通学路・・・昨日は人間の妹と歩いていたのにそれが1日で変わってしまうものなのだろうか・・・昨日同じ風景、同じ桜の木、同じように登校する生徒たち、同じように走る車・・・など昨日と同じ風景なのに・・・何か寂しく感じられた。愛華はそんなことはお構いなしに風景を楽しんでいた。俺はそれを見て何かいたたまれなく感じた。教室に着くと近くの友達としゃべる。斎藤智・新部明・小西桜・加藤尚子の仲の良い4人組だ。俺は小さい頃から近所に住んでいる小西桜が好きだ。身長は女子高生の平均よりも若干低いがそこがかわいい。栗色のショートヘアーガんともたまらない。つて俺は口リ属性か？？まあ、そこはいいとして・・・俺を含めた5人でホームルーム前の会話を楽しんでいた。「昨日学校で大きな爆発があつたんだって！！」

小西さんが言う。それは俺と愛華が悪靈だったかな？？に襲われたときのだな。

「ああ、差から今日の朝から業者の人たちが来てたのか。グランドに大穴開いてたからな。一体何があつたんだ？？」

智が言う。それは生徒会長が悪靈を切つて、悪靈が爆発したからだつたからかな？？それと俺達の契約のときのも含まれるのかな？？「最近だけど行方不明になる若い人たちが続出してるらしいね。まあ、若い人たちだけじゃないけどね」

加藤だ。確かにニュースではなんだかいじめを苦にしていた男子中学生が3日前から行方不明だつて言つてたな。悪靈と何か関係あるのかな？？

「ふつははは、事件があるところに新部あり！！俺はその行方不

明が明らかになつたときからそのこの行方を捜していくんだぜ……」

まったく親が警察だからってお前までやることないだろ明らめ。

「そんなこと言つなよ佑ちゃん、俺は将来警察になるんだから早くからやつても損はないだろ??」

だからその佑ちゃんはやめてくれ、はずかしい・・・。それよりももし危ない目にあつたら元も子もないだろ??

「そんなことを恐れて警察が勤まるかよ」

「だから佑ちゃんが言いたいのは明が危険な目にあつたら親が心配するつてこと」

「おお、ナイスフォローだよ小西さん。あなたは俺の天使だ!! 女神だ!!」

「佑ちゃん・・・田が羨望のまなざしになつてゐる」

なつなんと!! 気づかなかつたぜ。加藤に突つ込まれる俺。

「実は俺も明の手伝いしてゐるんだぜ」

お前もかよ智・・・。俺はなぜ彼らがそこまで事件に首を突つ込みたくなるのかが分からなかつた。

「それはだね佑ちゃん・・・」

「俺達が心霊探偵団に入部してゐるからなんだよ~~~~~」

ずつてーーん なんですかそれは~~~~? 俺は思わずイスからずつこけた。ものすごく痛い・・・。

「大丈夫?? 佑ちゃん」

心配そうな顔をして近づいてきた小西さん。ああ・・・小西さん・・・

・ありがとう。僕はもう死んでもいい。

「佑ちゃん・・・口から白いものが飛び出してる・・・」

はっ!! あぶない、あぶない。本当に死ぬところだつたぜ。サンキ

ユー 加藤。

きーん こーん かーん こーん 朝のホームルームの始まる鐘が鳴つた。

「――― また後でね」 「」

4人はそれぞれの席に戻つた。小西さんは俺の後ろの席。いつでも

話しかけられる。

『お兄ちゃん……なんかいやらしい田で小西さんを見るよね……』

ジト田で愛華が俺を睨みつけてくる。正直怖いです、ハイ……。  
でも愛華よ、そんなことはないぞ。小西さんは今日もかわいいな  
って思つてたんだよ。

『そのときの目がいやらしかった』

うつ・・・、うそは付けないな・・・。確かに俺は小西さんと一緒に  
にいたいと思っていた。ブランの愛華には悪いが俺は昔から小西  
さんのことが好きだった。でも、小西さんは今誰かと付き合つてる  
のかな??プライベートのことには一切関与しないようにしてたん  
だがな。それは万人に対してだぞ!!小西さんだけではない!!

『それよりもさつきの話・・・、やつぱり昨日の悪霊みたいなのが  
関わってるのかな??』

それは分からぬ。だから今日生徒会室で説明があるんだろう。  
放課後まで待てばいいさ。

『私は退屈なんだよ・・・。何か面白いことはないかな??』

周りにたくさんの守護霊がいるんだからそいつらと話せばいいだろ。  
『それもそうね。ありがとう、お兄ちゃん』

そう言つて愛かは近くの守護霊たちと会話を始めた。すぐに溶け込  
めているようだつた。相変わらず人間でも守護霊でもすぐに仲良くな  
れるのは愛華の才能なんだな。つぐづぐもつたいたいことをした  
もんだ・・・。それよりも昨日から俺は今まで見えていなかつた霊  
が見えるよつになつた。さらに守護霊と悪霊モドキの区別も付けら  
れるようになつた。なんというか・・・オーラが違うんだよな。守  
護霊はなんだかぽかぽかと暖かい感じがして一緒にいて幸せに感じ  
る。でも悪霊は近くにいるほど肌寒く、心が凍らされる感じだつた。  
これからどうなるんだか・・・。俺は小さくため息を吐いた。

## ターゲット③ 生徒会の正体　？（後書き）

感想＆評価よろしくお願ひします！！

ターゲット4 生徒会の正体  
? (前書き)

接触はいかに・・・。

## ターゲット4 生徒会の正体 ?

なんだかんだけ放課後になつた。勉強で疲れきつた頭を抱えながら生徒会室に足を運んだ。

がらがらがらドアを開くとそこにはすでに役員が全員いた。

生徒会長 吉川深夏

生徒会副会長 松本紗都子 開き枠1名

生徒会書記 花田美香

生徒会会計 小西桜

そこには思い人小西さんもいた。しかしつも見せている明るい笑顔ではなく、値踏みするような冷たい視線を送ってきた。ほかの役員たちもそうだった。生徒会長が歩み寄ってきた。

「疲れているところすまないがこれから昨日のことも含めて説明をしたいと思う」

「あ、はい」

俺は据わるように言われ、言われたとおりに4人に向かい合つ形で座つた。いや〜〜威圧感バンバン出してきますね〜。おつかない・。

「それではまず自己紹介からじょ〜」

会長が話す。

「私がここ蒼陽学園高等学校生徒会長3年の吉川深夏だ。幼いとき悪霊に両足をつぶされた。そのとき守護霊となってくれたのがかつての愛犬のハクだ」

会長の出した手のひらの上にふわふわと白い柴犬が現れた。

『にーちゃん、腕の痛みはない様で何より。この前はすまなかつたな。一般人を巻き込むつもりはなかつたんだが・・・まさか1日に複数個所に出現することは今までなかつたから対応できなかつたんだよ』

「・・・はい」

『お兄ちゃん……私はお兄ちゃんと一緒にいられるから大丈夫だよ』

「愛華……」

「次は俺だな。俺も同じく3年の松本紗都子だ。小学6年の頃に両目を失つた……。そして俺の守護霊は緋龍だ」

そこには若い男性の守護霊がいた。いまどきのファッシュンだろうか。そういえば守護霊が触れたものはすべて靈体化するんだった（守護霊がほしいと思ったものだけ）。

『おぬしのことはハクに聞いた。妹を殺されたそうではないか……。ついでいうが君もこっち側のものだ。耐えてくれ』

「……はい」

「ええと……あうへ、わた、私は1年の花田美香と申します。ええっと、私は去年の夏に海で吉川さんと同じく両足を失いました。この子が私の守護霊のルカです」

そこには小学生ぐらいの女の子の守護霊がいた。背は小西さんぐらいだろうか（小西さんの口り体系が萌え～って目の前で一番威圧感出してるんですけど……）

『どうぞよろしくね。神崎佑介くん』

「ああ……はい」

「最後に私ですね」

「小西さん？」

何で小西さんがここにいるんだ??いつも見てる感じ普通の女子高生だったじゃないか……。

『名前はいいわよね、佑ちゃん。私の守護霊のフィオネ。これからよろしくね』

最後はいつもの小西さんの笑顔だつた。一体どちらが本物なんだ? ?そこには女騎士の守護霊がいた。相当昔の時代の人だな……。

『汝……我らとともに戦う意思はあるか??』

俺を試している??それを読み取ったのか小西さんとフィオネは同時にうなづく。俺は右腕を奪われた……。そして俺は愛華を

やつらに殺された。恨んでも愛華はもつ戻つてこない・・・・少し  
考へてから・・・・。

「あります。やらせてください――お願いします」

「わたしたちははじめからあなたをここに向かいいれぬ」として  
いたから心配要らないわ。これからよろしくね。生徒会副会長神崎

佑介くん

「へ??」

いきなり俺が副会長??なんぞだ~~~~~!!

こうしてよく分からぬ生徒会と云ひ名の裏組織と接触した俺と愛  
華だった。

## ターゲット4 生徒会の正体 ? (後書き)

感想&評価・コメントお願いします。

ターナー6 初めての「シルバーン」？（前編）

最初の「シルバーン」は？？

## ターゲット6 初めての『シナリオ』？

やつしてお互に自己紹介が終わったところで生徒会長が会議を始めると切り出した。

ホワイトボードには初期の花田さんがなにやら地図を張り出した。

そして人数分のなにやら資料を配布してきた。

俺は藍華とともに資料に目を通していく。

なになに？？

蒼陽学園高等学校 家庭科室における謎の呼び声事件についての  
資料

（「いきなり事件ですか～～～？」）

（『お兄ちゃん、ここはみんなにおこひちゃんが有能な人だつてことをアピールするチャンスだよ！』）

（「おお・・・マイシスターよ・・・これでは俺がいつも無能な高校2年生だとこいつになつてしまつではないか・・・」）

（『わざわざそんなことないよ～～。お兄ちゃんはいつもテストはいい点どるし、運動神経も悪くないし、異性同姓かわいすやすれっこじゃんーーお兄ちゃんは有能だよーー』）

（「うへへむ、まあそりなんだが・・・なんでお前がこりこり知つ

てるんだよーーー（）

（『えへへ、お兄ちゃんのことなり何でも知つてゐるよ』）

（「怖！－何で星が黒なの？？ねえなんで？？」）  
といつかそれはさておき。

俺は再び資料を見た。

なになに・・・？？

蒼陽学園高等学校 家庭科室における謎の呼び声事件についての資料

・つい1週間前から家庭科室から謎の女性の声がするという声が  
多数来ている。

- ・差出人はいずれも夜遅くまで部活が行われている部活参加者。
- ・いずれも夜9時に決まって家庭科室で声を聞いている模様。
- ・われわれ生徒会組織の調査によると数年前に家庭科室で自殺した女子生徒がいるらしい、その生徒が悪霊化したのではないかと疑つていい。

以上 平成2年 記載者 生徒会書記 花田美香

などと書かれている。

てこうか怖いよ！－マジで幽霊だなんて怖すぎるよーー！

俺は何ができるひゅうんだ？？刀は効くのか？？早速俺の覚悟は  
揺りぎり始める。

そんな俺の疑問に小西さんが気づいたのかアドバイスをくれる。

「今佑ちゃんの持っているその刀はただの真打の刀。ただし、佑ちゃんの守護霊・・・藍華ちゃんの靈気を刀にまとわせることだ悪靈を切ることができるんだよ」

おお～～小西さん。やはりあなたの笑顔は天使だ～。

ありがとう～。

そんな俺の心の言葉が分かったのか、フイオネはくすくすと笑っていた。

笑わなくともいいだろ??

ぐすん・・・。

そうしてそんな俺のことは無視して会長は高らかに宣言する。

「それでは今夜の8時30分に再びここに集合。そして9時には家庭科室付近を立ち入り禁止に!! 9時に悪靈を討伐する」

「…………」「了解……」

あつら～～??

俺もつられて言ひやつたよ～。

隣では小西さんがガンバ～～の意味を込めてか親指をぐつとつき立てた。

ほんとに俺・・・大丈夫??そして心優しい妹の藍華はそんな緊張

する俺に。

『大丈夫だよお兄ちゃん。危険なときには私が守るから』

妹に守られる兄って一体・・・。

ガク・・・。

## ターゲット6 初めての「シナリオ」？（後編）

感想・評価・コメントお待ちしております。

//ラ・シ・ピ ノ・ア 初おとえ//ラ・シ・ピ ノ・ア(前書き)

今戦いが始まる・・・。

## //ミッション7 初めての//ミッション～

そうしてその日の夜8時30分。生徒会メンバーは生徒会室に集会していた。

「これより今日の//ミッションを決行します。私と小西が先陣を切るのでほかは後衛を頼みます」

生徒会長が宣言した。これは絶対従わなきやいけないな。俺まだこの使い方知らないから。俺の右手には一振りの刀があった。

契約時に手に入れた刀だ。『牙狼丸』これが俺の相棒。でもどう使えばいいのかがまだわからない。まあ、今日のミッションは見学みたいなものだからな。俺は余裕しゃくしゃくだった。

「了解」

いつものははきはきとした声ではなく、ただ無機質な声を出す小西さん。ここで俺は少し不安になってきた。

「「「了解」」」

俺たち3人も同じく承諾する。

こつ こつ こつ こつ

5つの靴音が学校に響き渡る。学校にはすでに5人以外の生徒はない。

さらに学校内にも誰もいない

どうやら会長が結界を張り、学校に近づいても入る気をなくさせる効果を持つ結界を張ったそうだ。ほかの生徒には被害にあって欲しいことからだった。そしてようやくついたそこは家庭科室。例の女子生徒の声がするところだ。中からはうわさじおりの泣き声が聞こえてきた。

「…………うう・ひぐ・えつく・なんで？？・・・なんで私が？？・・・なんで？？・・・」

ひつ！

俺は思わず声を上げてしまつた。

ごちん！

刀の鞘で頭を思いつきりたたかれた。会長だつた。

「男なら、いれぐらーの」とおびぎるのではない。それともお前は男ではないのか??

「んなわけないだろ!! わかつたよ!! 悪かつたよ!!」これつきりだ!!」こんちくしょう!!」

俺はやけくそ気味に叫んでみる。それを見ていた4人はくすくすと笑っている。つて俺何かおかしなことしましたか？？ああ・・・小西さんまで・・・。俺悲しすぎる・・・。そんなこんなで俺たちは時間をつぶし、時間通りに9時に家庭科室に突入した。武装は以下のとおり。

- ・ 会長 日本刀（俺と似たもの）『鬼爪丸』
  - ・ 松本副会長 ビデオカメラ（どうやら彼女は先頭というよりも対悪靈のための情報収集者らしい）
  - ・ 花田書記 御札（彼女の家はどうやら神社らしい）
  - ・ 小西さん（会計） 日本刀（俺や会長と同じ）『龍神丸』
  - ・ 俺（副会長） 日本刀 『牙狼丸』

俺たちの目の前に広がるのは暗い暗黒の空間のみ。花田さんは教室内に御札を貼っている。

「花田さん、何をしていらっしゃるのですか？？」

「君のお母の幻闘では懸念せんせ由もあつてくれませんから。無理やつらがおつ由しやねのですよ。つらがら」

こわー！人ヒトが変わかわっちゃつたよー！そう思つた瞬間、目の前まへがまぶしすぎる光で包まれた。外の結界でほかの人ひとには気づかれないらしい。

（会長がこつそりと教えてくれた） そうして俺たちの目の前には1人の女子生徒がいた・・・。 というよりも女子生徒だったといつたほうがいいかもしない・・・。 顔は涙や鼻水でぐちやぐちや・・・。 体は骨と皮の状態で、背中からくものように8本の足が出ていた。 そう、家庭科室中が蜘蛛の巣だらけだったのだ・・・。

「ちつ！－レベルいか。今日は少し時間がかかるかもしけないな」

会長が珍しく弱気な発言。

「大丈夫で巢や会長。隣には小西さんがいますし、バツクには花田

さんがいます。あ・・・神崎君は今回は荷が重いかしらね・・・

「う・・・、俺今日役立たず??

「そんなことよりもいくぞーーー。」

会長かつこにいーーー。

「はいーーー。」

小西さんいつも人柄とのギャップが大きいですーー。

2人は悪霊に向かってかけだす。花田さんが後ろからお札で悪霊の攻撃を無力化して会長と小西さんがそれぞれ足を切り刻んでいく。きられるたびに悪霊は奇声を上げる。鼓膜が激しく揺さぶられる。そんな時俺の頭に何かが映像として流れ込んできた。なんだこれ・・・。

・

・

どうやら夕方らしい。ここは・・・教室らしい。俺は1人入り口に立っていた。そして目の前には悪霊化するまえの女の子と同級生らしい男の子がいた。

女の子は何か包みを渡しているようだ。クッキーだった。男の子はそれをうれしそうに食べていた。女の子もうれしそうだ。

どうしてこんなにも笑っている子が悪霊化してしまったのだろう・・・。俺には理解できなかつた。そしたら声が聞こえてきた。

「・・・くん・・・。私あなたのことが好きです。付き合ってください」

「うわっほーい。男のこの方はおっけーー出してくれましたよおめでとうござりますーーでも悪霊化するってことはこの後何かがあつたんだろうな・・・。そうするとまた映像が変わった。すると田の前にはあの男の子とまた別の女の子がいた。

「よろこんでーー。」

うわっほーい。男のこの方はおっけーー出してくれましたよおめでとうござりますーーでも悪霊化するってことはこの後何かがあつたんだろうな・・・。そうするとまた映像が変わった。すると田の前にはあの男の子とまた別の女の子がいた。

なんだかいやな予感がしてきた。

「・・・くん。私あなたのことが好きな。付き合ってくれませんか?？」

「ああ、いいぜーー。」

「ほんと??.やつた。でも今の彼女はどうするの??.」

「ああ、あいつはもう飽きたから捨てる」とにするよ。今はお前が好きなんだよ。」

「わやわやうれしい～」

信じられなかつた・・・。どうやらあいつは女たらしのようだ。もてることを口実にほいほいと女を替える・・・。許せん！－彼女のにもなつてみろ！－お前のために毎日弁当作ってくれてたじやねえか！－お前はそれをおいしいといつて笑顔で食べてたじやねえか！－そんな優しい彼女の思いをお前が踏みにじつたんだ！！

俺がそう思つている隣でじわつと言ひ音が聞こえた。振られたあの女の子だつた。どうやらこつまでたつても来ない彼氏を探しに来たのに聴きたくない言葉を聞いてしまつたのだろう。その姿を見た彼氏は逃げるように新しい彼女をつれて逃げるようにかえつて言つた。

彼女は泣いていた・・・。抱きしめてあげたいと思つた・・・。こんなにもかわいいのに・・・。一途だつたのに・・・。信じていた人に裏切られてしまつた彼女の心はどうほど傷ついてしまつたのだろうか・・・。

「なんで・・・？何で私じゃダメなの・・・？ねえ・・・なんで？」

彼女はのろのろと歩き出した。俺はそこからまた動けなかつた。そして気づいたときには家庭科室だつた。目の前には遺書を置いて首をつるうとしている彼女がいた。俺はやめろと何度も叫んだ・・・。しかし聞こえるはずもなかつた。くやしかつた・・・。だってこれは悪靈となる前の彼女の記憶だから・・・。

そして苦しみながら彼女は死んでいった。俺は見てることができなかつた。見ることしか、聞いてることしかできなかつた。動けないから・・・。何で動けないんだ！－何がおきてるんだ俺には！

！手には刀、『牙狼丸』があるところに・・・。

カタカタと刀が動く。まるで俺を抜けといわんばかりに・・・。俺はお前を抜くことはできない。だって体が動かないから。そうしたら田の前に妹の藍華が現れた。

『お兄ちゃんはこの人のことを助けたい？？』

妹が当たり前のことを聞いてくる。

「当たり前だろ？？あんなに傷つけられたのに・・・ぼうぼうのままで・・・死んでいいはずないだろ！－」

俺は藍華に向かって今までにないほど怒りをぶつける。藍華は少しひっくりしていたが、すぐに薬と笑った。

「何がおかしい・・・。おれは当たり前のことを言っているんだ・・・」

『ここ』で彼女を助けても現実では生き返りはしないんだよ

「そ、うだらうな・・・。でもな・・・いつまでもここに未練を残してたら次に進めないだろ？？この子の魂はずつとここにあった・・・。誰にも救われず・・・。誰にも気づかれず・・・。ずっと一人ぼつちだったんだ・・・。だから俺は・・・」

「う・・・俺が今したいと思つことは・・・。

「俺は生徒会副会長だ！！学校にいる生徒全員の幸せを願うのが俺たちの仕事だ！！だから俺は彼女の魂を救つてやる－－！」

俺は曇りのない答えを言い放つ。そしたらパリンという音がしたと思つたら、先ほどの先頭の風景に戻っていた。会長たちは方で息をしていて、花田さんはすでに御札がきれかかっている。松本さんはすでに10本以上のビデオを映している。じつやら俺は相当の時間悪靈の記憶を見ていたようだ。

「すいません。なんだか悪靈の記憶らしきものを見ていました」

「悪靈の記憶？？それよりも何とかしなくちゃ……。こくわうひもすぐに回復しちゃうのよ。会長も小西さんも疲れが出ていて……」

「わかりました……」

俺はそういって悪靈の前に立つ。やはり涙を流している。つらかったよな・・・・。悲しかったよな・・・・。恨んだらうな・・・・。でもそんなものは俺がすべて切つてやるぜ。お前は今負の鎖につながれている・・・・。俺にはわかる・・・・、藍華がそう教えてくれたからな。

「会長！…小西さん！…俺がやりますのでどこでください…」

「佑介くん？？」

「祐ちゃん？？向するつもり？？」

彼女を救うには正の靈圧をかけてあげるしかない。しかしどうすれば・・・・。

『お兄ちゃん……大丈夫だよ。藍華がいるから。お兄ちゃんと私はなにでもできるよ！』

「べすつ。 そうだな」

今の俺はやわらかい笑顔になつてゐるだろう。久しぶりだな……。  
『私の靈氣を『牙狼丸』の刃の表面にコーティングするから。後はお兄ちゃんの好きなようにしてね』

「おいおいー！ 最後の最後で俺に振るのか？ 大仕事を俺だけに？』

『大丈夫だよお兄ちゃんなら。だつて刀の問いかけが聞こえたんでしょう？』

そうだ……。あの時俺に問い合わせていてのだ……。俺たちならできると……、だからお前はやるのかと……。そして俺はやりたいと思つた。なら答えはひとつ……。

「俺は悪霊の魂を救う！－！」

すると俺の右腕と刀が一体になつた感じがした。今なら何かができる気がした。藍華はすでに完了したらしく見てゐるだけだ。ほかの役員も俺のことを見ている。悪霊は俺と正面で退治し、今にも襲い掛かろうとしている。俺は入門書で興味を持った構えを取る。抜刀の構えだ。

「俺はお前の魂を救つてやる……。だから少し待つてろ……。」

そうして俺は一気に抜刀した。刀の刃からは白い残檄が飛びだした。それは悪靈をすべて包み込んでいく。悪靈は悲鳴を上げて消えていく。。。花田さんはすぐに御札を使い、成仏陣をはり、その中に女子生徒が倒れた。傷一つない状態で。おそらく死ぬ前の姿だろう。きれいだった。そして彼女はゆっくりと起き上ると俺たちに笑顔を作り・・・言った。

『「ありがとう」彼女は光に包まれて消えていった。残ったのはまさっきの家庭科室。何事もなかつたかのようだ。』

「『「苦労だった。佑介、今日は助かった。このままだったら私たちはやられていたかもしれない』

「『え・・・俺はできる限りをしただけですか？』

「『うひうひへ、できることがすぐ大きこことなんだよ佑』

「佑？？？」

「『うひうひへ、できることがすぐ大きこことなんだよ佑』

「緊張しそぎですよ花田さん」

「『ありがとうございます、佑介ちゃん。おかげで助かつたよ』

「『うひうひしました』

「今日の戦いは俺が責任を持つて分析していくから明日の放課後生徒会室でミーティングということです」

「みんな、異議はないわね？？」

「「「ないで～す」」

「ふう、それじゃあ今田は解散」

「「「お疲れ様でした～」」」

そりして俺たちはそれぞれの家に帰つていった。俺と藍華の初めてのミッションは成功だった。しかしこれからも厳しいミッションが入つてくるんだろうな・・・。そう思いつつすぐに眠りに落ちてしまつ俺だった。

「シラマヘン 初めてのシラマヘン（後書き）

「メンテお願いします……！」

## じたばた騒ぐ//シソノハ修学旅行～飛行機編～（前書き）

次の日の朝何かが起きたるーー！

楽しみにしていたはずの修学旅行が・・・。

## いたばた騒動!!/シショーン修学旅行へ飛行機編

ちゅん ひゅん ちゅん

すずめの鳴き声と共に起き上がる俺神崎佑介。昨日のミッションの疲れはなつようだ。ゆっくりと伸びをして立てかけておいた刀を手に持ちしたに降りる。顔を荒いすつきするトリビングには守護霊である藍華がすでに朝食の準備をしていた。

「おはよう、藍華。体調の方はどう?」

俺の昨日使った昨日の靈氣の斬撃波は藍華の靈氣だったからだ。心配するのも無理ないだろ??俺つて優しいお兄ちゅん??え??当たり前??そうだよな~~。

そんなことよりも朝食が完成するまでの時間俺は刀の素振りをする。剣道の振り方だけではなく、自口流で抜刀の練習もしている。

しかしよくぶつけ本番でできたよな~~。俺つて天才??え??自惚れるなつて??そうですね・・・「めんなさい。俺がしょげていると藍華が朝食ができるのか元気よく俺のことを呼ぶ。

『お兄ちゅん~~~』飯できたから早く食べよ~~~』

「はいはい、了解しました」

俺たちは朝食を食べ終わると学校へ向かった。そういうえば今日は生徒会のミーティングだったな。まあ、裏の仕事のほうだけどね・・・

俺は刀を藍華にもたせて通学する。またか銃刀法違反はしたくないからな・・・。

そうして学校について俺のクラスに入るとそこには小西さんしかいなかつた。彼女以外には誰もいない。

「待つてたよ・・・佑ちゃん」

いつも笑顔で俺に声をかけてくれる。しかし雰囲気が違う。

「おはよう、小西さん。早いんだね・・・」

「うん・・・佑ちゃんと話をしたかったから」

がらがらがら

突然開いてない扉が開けられた。そこには生徒会長がいた。

「あ、会長おはようございます」

俺は「いつも」とく低姿勢で挨拶する。しかし会長はただ小西さんだけを見ていた。見ていたといつよりも睨んでいるな。ただならぬ威圧感に俺はおそれ気味・・・。

「変な結界朝早くから仕掛けてると思ったら佑介君とお楽しみでもしようとしたのかしら?」

会長は厳しい口調で質問する。

「いいえ、私は昨日の事について少し聞いておきたいことが彼にあつたもので……」

はきはきとしたいつもの口調ではなく、仕事モードの無機質な声だつた。

「それについては松本がすべてまとめてくれている。知りたいことは放課後にしる。これでは生徒たちが遅刻してしまうぞ」

最後だけは会長は笑つて会話をくる。小西さんは仕方がないといわんばかりに顔をしかめて結界をとく。

### 「結界崩壊」

結界を張るために使われていた御札が青い炎で焼かれて消えてしまつた。するどすくに教室の中に生徒たちがぞろぞろと入ってきた。友達の齊藤智・新部明・加藤尚子もいた。教室内には俺と小西さんと会長だけしかいなかつた。でもよく見ると会長はいなかつた。

(会長逃げやがつた!-!)

そんなことより、彼らの眼から見れば俺と小西さんが何か卑しいことをしようとしていたのか、はたまた告白していたのではないかと映つてゐるに違ひない!! そうに違ひない!! それを無視して俺は彼らに挨拶する。

「おはよう3人とも……。今日も天氣がいいね~」

確かに快晴である。しかし彼らは誤解していた。否クラス全員がだつた。

「「お前ら2人で何してやがつた～～～！」」

悟と明が涙と鼻水でぐしゃぐしゃになつた顔で聞いてくる。

（汚いからまず拭け）のやうひつ・・・・

「・・・あの～～」

なんだか言いはずりひつに聞いてくる尚子。顔が真っ赤だ！！

「桜つちと何かした？？」

いやいやいや！！何もしていませんよ尚子さん！！俺はただ2人で世間話をしてただけです。

「休日のバーの打ち合わせか？？」

バカの谷川が聞いてくる。お前は本当にバカだ！！俺はまだ小西さんとは付き合つてない！！ただ世間話をしていただけだ。

「それじゃあ桜つち。何について話してたの？？」

だからただの・・・・。

『黙りなさい…』

クラスの女子に怒鳴られた・・・。こわー！何この恐怖・・・。

「聞いたしたのは私の方なの 昨日のことなんだけね・・・。

夜に学校であったことについて・・・

ああ・・・、その「夜」と「学校」という禁じられたワードを使えば最後ですよ～～小西さんって・・・目の前には・・・眼を光らせた女子たちと鬼の形相の男子たち。

がたがたがた・・・、恐怖です。殺される??僕も守護霊について・・・おわ～～殴るな!!イタイイタイ!!つてどうして小西さんは顔を真っ赤にするのですか??それでは逆効果ですよ!!俺は必死にアイコンタクトで小西さんにごまかすように伝えた。小西さんとフイオネなら俺の意図を完璧に理解してくれるはずだ!!頼むぜ2人とも!!・・・しかし俺の期待は裏切られた。

「大変だつたんだよ～～、糸がぐるぐる巻かれてて、何度も繰り返しても倒れないの・・・。私限界までがんばったんだけどな～～。やつぱり最後は佑ちゃんに持つてかれちゃった。テヘ」

黒いですよ!!黒いですよ!!最後の星がなんだか悪意を感じる黒なんですねけれども!!小西さん!!あんたわかつてやつてるでしょ!!フイオネも笑うな!!藍華助けてつて何怒つてるんだ!!お前は4~6時中俺のそばにいるのだからこれは嘘だとわかるだろ!!ホレまた火に油を注いじまつたつて・・・おいおい怖いですよ皆さん。ここは落ち着きましょうつてぎゃ～～。俺の断末魔が学校中に響き渡つた・・・。

きーん こーん かーん こーん

そつこいつていううちに放課後になつていたな。俺は愛華を連れて生徒会室へ向かつていた。

1年生の教室は3階。生徒かいしつに行くには1階の3年生の教室を横切らなければいけない。入学当初は緊張していたが最近は慣れてくれた。

がらがらがら

ドアを開けるとそこには佑介以外の生徒が集まっていた。早いな皆さんって俺が遅いのか??だったら小西さんはこいつからここに?俺の後に教室でたと思ったのに。

俺が頭の上に浮かべていることを無視して会長は早く座るよに行ってきた。

すいません・・・小さくなりながら俺は定位置の席に座る。会長が立ち上がり宣言する。

「それではこれよりミーティングを開始する。松本、報告を頼む」

右隣に座る松本さんに指示する。俺達には松本さんから資料のよつな冊子が渡された。

なになに??ああ、昨日の悪霊退治についてか。俺は軽くその内容を読んでいく。みなもそのようだつた。そして松本さんがホワイトボードになにやら地図を張りだした。

蒼陽市の地図だった。蒼陽市は日本で最も大きい都市でさうに恐ろしことに心靈スポットもまた多かった。

「最近ですがここでは悪霊が大量に出現しています。ほかの学校の生徒会も対策に乗り出しているようですが一向に効果日はありません

ん。これが何を示しているのかはわかりませんが、近い上来何か嫌なことが置きそうな気配がします。そのためにはこの異常事態が何を示しているのかを調査する必要があります」

「そこでわれわれで心霊スポットに赴き、何があるのかを調査したいきたいと思っている。もちろんほかの学校の生徒会の人と一緒にだ」

会長が腕を組みながら話す。花田さんは松本さんが張った地図になにやら印を付けている。

「花田さん？？その印はなんですか？？」

「は、はい。これはですね皆さんの守護霊が最も負の靈氣を感じるところ心霊スポットですます。ざつと5箇所ですかねますかね」

変な日本語になりながら説明してくれた花田さん。戦闘中はあんなに強気なのに・・・。

俺の隣の小西さんはなにやら電卓を片手に計算しているところだった。どうやらその5箇所に行くのに必要な金額を出していよいようだ。あまりの速さに俺は目を回しあうだ。

その後は普通の生徒会がするような仕事をした俺達。時間が6時になつたので帰ることになった。そこに俺は会長に呼び止められた。

「神崎くん、ちょっと話があるから残つてくれないかしら。そんなに時間はとらないから」

俺は分かりましたと3人が帰つた後も残つていた。そこに会長との守護霊のハクがやってきた。

「神崎くん、あなた昨日の戦いで途中気を失つてたらしきも・・・。どうしたの??」

「なんですかね~突然知らない風景が目の前に現れて、阻止寺悪量化していた生徒が現れて・・・それはまだ生きていたときのものでした。なんだか好きな人がいたらしくて、最初は付き合つて幸せでしたが、その彼氏が女たらしで振っちゃつたんですよ。それがショックだつたらしく・・・そんなことを見ましたね。たぶん生徒さんの記憶だと思つんですけどもね」

『うむ、お前にはなにやら特別な力がやどついているようだ。それがお前が手に入れたものなのか、それとも守護霊が持つたものなのか・・・。それは分からない。しかしその力はかなり役に立ち。お前はこれから最前线で戦うことになるぞ!』

俺はその言葉に一瞬ビビッてしまつた。それを見逃さないのが会長だ。

『びびるのは仕方がないわね。この前討手になつたばかりなのに、いきなり最前线だなんて・・・。死に行けといつてるもんだわ・・・。でもあなたがその力を持つたことは何か理由があるはずよ。だから覚悟を決めて欲しい』

真剣なまなざしで俺を見つめる会長。俺覚悟の前に会長の目に見とれてしまつますよ。そこにばつと愛華にたたかれた。

『お兄ちゃん・・・またいやらしい眼になつてた』

軽蔑するような目で見てくる愛華。おお、マイシスターどうかこんな兄を嫌いにならないでくれ・・・。

くすくすと笑ひ余韻とそんな俺をあきれたようにみるハク。そしてジト目で見てくる妹。こんな風に何も起こらなければいいのに・・・。そんな淡い希望は簡単にくずされる・・・。

そして月日は川のように流れつゝて明日からは修学旅行だ。

俺達の学校蒼陽学園高等学校は京都・奈良の日本の歴史に触れる修学旅行を計画していたのだった。

俺の楽しみなのは小西さんとのグループ活動。ほかにも男子や女子がいるけれど俺には関係なし!!俺は小西さんと一緒にいられればもうしあわせ〜!!わははは〜。

『お兄ちゃんが壊れた・・・グス・・・エグ

どうしたんだマイシスター。お兄ちゃんはまだまだ健全だぞ。おーい。

『お兄ちゃんは愛華の方が好きなんだよね??だよね??』

そんなにウルウルさせた目で見られたらいいござりいだらーーお兄ちゃんは愛華の方が好きだよ(妹として)。

『だよね~おにいちゃんが私以外に好きな人ができるなんておかしいからね~』

けろりと機嫌を直してしまった愛華。まったくお前は扱いやすいんだよ・・・ばれたら殺されるな・・・。

『お兄ちゃん・・・愛華のこと嫌いになつたら・・・覚悟してね』

はい！－！つい覚悟してねつて怖い表現に つけてかわいくするなよ  
な－！余計に気味悪いよ－！

まあそんなことはおいといて、俺はいつもの田課の素振りを終わらせてから床についた。

明日からは修学旅行へふふふ～ん。こにしぃさんとあんなことやこんなことって愛華も一緒に来るからたとえできても見られて殺されると…い～や～！！

翌日、いつもの田課を済ませて、前日までに準備していた荷物を持って学校へ向かう。途中幼馴染の斎藤雲に会った。

彼女とは3歳からの付き合いだ。そのときまだ親が仕事に成功していなかつたからいつも家にいたけれども・・・。まったくあいつら今頃何してるんだか。嫌いにはなりきれない、そんな俺がここにいた。

「な～に1人で詩人みたいになつてるのかな？？似合わないぞ～」

ばつか、別にいいだろ？？と言つかお前と会つのは久しぶりだよな？？2年なつてから余りあわなかつたしな。

「だつて佑ちゃん生徒会に入っちゃうんだもん」

別に生徒会のせいぢやないだろ？？朝だつて今まで一緒に行つてたんだしさ、2年なつてから行かなくなつたじやん。どうしたんだ？？

「ううん、別になんでもない。でも今日は祐ちゃんに会えたからツキーだな」

別に俺に会つたからその口がラッキーになるわけじゃ……。

「別にいいじゃない その人がそう思つてるんだからわ」

まあ、それなら仕方がないよな。

「やうこつ」と

そういうしていふうちに学校についてしまつた。俺達が住む愛知県からヒコーキで行くことになつていた。だからいつたんバスで空港に行かなければ行けなかつた。

出発まで時間があつたので、乗り込んだ後に俺は昨日のことを思い出していた。それは同じ県の有名私立校聖セリーアナ学園。女子高だ。つてなんで俺以外の戦う人つて女人の人なんだ??

「私は聖セリーアナ学園生徒会会长峰岸脩子です。そしてこちらが副会長木村彩香」

「副会長木村彩香です」

「わたしたちはあなたと同じく片腕を失いました。そしてこちら私の守護霊伸介です」

そこには中年の男性がいた。黒いコートを羽織つて「ひらりを一瞥し、口を開く。

『なんだよく見ればただのガキじゃねえか!!俺は手つきつ女の子

が来てくれると思つてたのに』

なんだこいつは？？ただの女たらしか？？そういえば『の前の悪靈化した原因も女たらしの男だったよな。何だよお前は、別に俺だつてお前なんかと会いたくなかったぞ。俺はこいつのきれいな女性方とお話できればよかつたんだ。

『んだとガキが！！』

ぶつた切る守護靈風情が！！

「まあまあ、落ち着いてください。これでは話が進みません」

すんません。取り乱しました。

『フン……』

なんだここつー、そっちから振つてきたくせにーー。俺は怒りを何とか抑えて話を聞く。

「『』愛知県には5つの強力な靈的スポットがあります。それらに取り付く親玉と言えばいいでしょうか。討伐する事ができれば何とかできるはずです」

副会長の木村彩香が懇切丁寧に教えてくれた。あー、ありがとうございます。このいただいた資料はいかゞでも利用させていただきます。

「それと・・・」

生徒会長峰岸脩子さんが続けてきた。

「あなたたちが今度行く修学旅行なんだけれども、京都奈良にもいくつか強力なところがあるからそこに行つて討伐してきてほしいの。わたしたちの学校もそこに行くはずだから。私たちの仲間ともうまくやつてね。みんな女の子だから。あなただけが頼りなのよ 神崎佑介君」

思わず鼻血が出そうになりました。わかりました俺神崎佑介が皆さんに危害がないように精一杯頑張ります。

『ふん、こんなひょうひにできるわけ『できるよーーなんだって私のお兄ちゃんなんだから!..』『そつよ、唯一の男の子なんだから、頑張ってくれるわよ』ふん!..』

突如現れたのは彩香さんの守護霊。

『椿です。ようじく』

和服を着込んだ平安美人だった。そういう回想してゐるうちに眠つていたようだ。俺達は空港へ向かっていた・・・。

現在飛行中であります。忌まれて初めての飛行機に俺も愛華も興奮を隠しきれなかつた。

『お兄ちゃん、家があんなに小さく見えるよ』

ああ、そうだな。空から見れば俺達はちっぽけな存在だな。

『お兄ちゃんも感慨にふけつてないで外見よつよ』

ああ～、ちゃん見てるや～。富士山が見える～。

『わ～、大きいね～』

「佑ひちゃん楽しそうね」

ああ、菜月か。こいつも俺の幼馴染の龍坂菜月。たつさか なづき こいつも俺が3歳の頃からの付き合いで、何かとちょっかいかけてくる。

「京都・奈良にはどこ行くの??」

金閣・清水寺・平城京跡・平安京跡・清明神社かな。

「結構いいといふこくんだね。それに幽霊スポットの行くんだね」

幽霊スポット・・・そうだ。俺らが行くのは全部悪霊が住み着いているらしいところ。

さうじそこが親玉たちの隅かともうわざわれてこる。負の力の中心となっている蒼陽市に攻めてこられたら・・・。

俺達どうなつちゃうんだろ・・・。それより人間生きてるかつて話・  
・・・。ああ・・・俺責任重大!! 頭痛い・・・。

「佑ひちゃんそんなに心配しなくてもいいんだよ」

いつものさわやかな声で話しかけてきたのはちょうど後ろに座っている小西さんだった。どうやら近くにいるフイオネが俺の気持ちを感知して、小西さんに伝えたのださう。ありがとうフイオネ。グッジョブ!!

「どうしたの佑ひちゃん?? 落ち込んだり、青くなったり、嬉しそう

になつたり。大丈夫？？』

大丈夫です小西さん。あなたの笑顔が俺にとっては万能薬ですから。

「私も加勢するから大丈夫だよ」

『私だつてお兄ちゃん守れるもん』

『くくく、妹ちゃんが嫉妬しているぞ、桜』

「愛華ちゃんかわいいね、大丈夫だよ。お兄ちゃんは取らないから

がーん！俺撃沈？？片思いは終わつた？？

『やつたー、お兄ちゃんはずつと愛華と一緒にだ～』

「今はね・・・」

『？？何か言つた？？桜～』

『どうしたのです？？桜。顔色が優れなもそつですが・・・』

「大丈夫だよ。ほら、いつもの笑顔～」

あ～その笑顔を独り占めにしたかつた。

「佑ちゃん！！私をほつっておくとはいひ度胸ね・・・」

ぎや～菜月！！そんなに怒るな～！落ち着けます。

「私はいたつて冷静だよ？？」

そんなわけないでしょ！！あなたが一〇一〇しながら迫つてくるときは決まって俺にとつてはよくない」とが起るんですよ！

「覺悟」！！

ぎゅ～！～！となんだ？？いつまでたつても襲つてこないので俺は  
つぶつた田を開けてみると・・・。

「！…」これつて・・・

止まっていた。時が止まっていた。

『お兄ちゃん？？』

愛華も困惑している。俺は愛華を傍に抱き寄せた。何でこんなとき  
に顔赤くするんだよー！

『お兄ちゃんが大胆だからだよ！』

こんなの大胆にも入りません！！

「フィオネ？？これは一体・・・・」

『おそらくこの飛行機に取り付いて悪靈でしょう。このままではいずれ時間は動き出すかもしませんが・・・墜落は確実ですーー』

どうしてだ？

『これに取り付いたのはかつて飛行機事故でなくなつた人たちの靈です。すでに悪霊化してるのでしよう』

「確か・・・飛行ルートに心霊スポットがあった」

「そなんですか?? 小西さん。

「ええ、数年前に飛行機墜落事故で出来上がった巨大なクレーターがあるの。そこによく靈が出るそうで、行つたものは必ず乗り物事故に遭つてゐる。これらはすべて、悪靈のせいだ」

「わ～ん、また小西さんが人変わっちゃったよ～。ってそれよつどうすればいいんですか??」

「（）に花田先輩から借りてきた御札があるからこれを遣つて悪靈たちを誘き出す。その後はやつらを討伐すればいい」

『了解しました！…愛華…！』

『了解、お兄ちゃん』

そういうと愛華は俺に刀『牙狼丸』を渡した。うん、今日も右手のしつくり来る。

『それでは行きます』

ああ・・・無機質な小西さんに声が飛行機内の木靈する・・・。一枚の御札を周りに投げる。すると次の瞬間俺達は恐怖のどん底に落とされる・・・。

「なんなんだよ」つら・・・

俺達の目の前に現れたのは原形をとどめていない人間だった悪靈たちだつた。それもものすごい数だつた。

「こんな相手できるのか?? 2人だけで・・・。

「小西さん、どうするんですか?? こんな数じゃ俺達だけじゃなんともなりませんよ」

「！」となどこないであきらめてたら立派な討手にはなれない

無機質な声が放たれる。俺は別に討手になりたかったわけではない。

「それに全滅させなければ生者の魂が食われてしまい、やつらの仲間になつてしまつ。それでも祐ちゃんは戦わないのか??」

そんな・・・。ここにいるみんなは修学旅行を楽しみに来てたのに・・・。こんなやつらに潰されていいはずはない・・・。

「愛華・・・力を貸してくれ・・・」

『オッケー。お兄ちゃんの話つことなら何でも聞くよー!』

ははは、それはどうこうとかな?? 俺は刀を受け取り構える。小西さんもすでに構えから走り出していた。悪靈の数は・・・。

『100体ですー!』

小西さんの守護霊のフィオネの声がする。どうやら計算してくれていたようだ。まあ、小西さんの計算能力は生徒会でも活躍しているからな。

「よひしゃー、俺がまとめて手前らを救つてやるぜーー。」

俺は駆け出して愛華の生の靈氣を刃に滑りせし、悪霊たちを切つてい  
く。

・・・

どれくらい経つただろうか・・・。俺と小西さんはすでに体力の限  
界だつた。何とか半分倒せたが、まだまだじゅうじゅういやがる。  
これじゃあ限がねえ。

「リリは一発あれをぶちかますか??」

しかしあれは愛華に対するダメージも大きい。半田は休んでいない  
と回復しないくらい大量の靈氣を消費する。しかし・・・この状況  
を打破するにはそれしかないのではないか??俺が悪霊たちが迫つ  
ている中迷つているのを小西さんは・・・。

「それでは私も加勢するよ、祐ちゃん」

無機質な声で頼もしいことを言つてくれる。しかし小西さんは俺  
と同じよつな」とはできるのか??そんなことを考えていると。

「私の刀だつて祐ちゃんとビーフクラスの業物だよ。できないわけな  
いよ」

「おお~なんと頼もしことを言つてください。それなら俺は半分の  
力で放つことができる。

「私と同時にになつてくれる??」

お安い御用ですよ小西さん。愛華に確認を取ると愛華もそれに賛同してくれた。何度も愛華ばかりに負担かけたくないからな。

「フィオネー！」

小西さんが守護霊のフィオネを呼ぶと、戦っていたフィオネは自らの剣と同化して小西さんの目の前に突き刺さった。

でもよく見ると剣の刃だけが残っていた。小西さんーー刃だけじゃ何にもできませんよ？？

「心配は要らないよ、佑ちゃん」

そう言つて自らの刀を一度鞘に戻し、再びぬくとそこには柄だけが残っていた。刃が消えていたのだ。一体なんなんだ小西さんの刀は！！

『フィオネはきっと同化能力を持つ守護霊なんだよ。きっとあれがフィオネの特殊能力。そして私の能力は悪霊たちの悪量化した原因を知ることができる能力。それがこの前発動したんだよ』

なるほどなー。それで納得。それじゃあほかにも色々な能力をもつ守護霊がいるんだな。

『やうなるね。それよりお兄ちゃん。そろそろだよ』

哀歌の言葉に俺はすぐに反応し、鞘に刀を納め、抜刀の構えに入る。

「我と契約し守護霊の名はフィオネ、我的刀と同化し、悪の根源悪

靈を滅する力をわれに『えたまえ！』

かつまばゆい光が機内に放たれる。俺も目を開けていられなくて思わずつぶつてしまつ。そして光が収まつた目の前には青く輝くレイピアを握つた小西さんがいた。あれはフイオネがもつていたものと似てゐるが柄は日本刀だ。空中に浮いている青い発光体を破壊するとそれは霧散した。

「靈劍・『龍神丸』」

あれが小西さんの武器の本当の姿。青く輝くレイピア。一体どんな力が秘められているのだろうか。

そんなことを考えていると小西さんはすぐに突きの構えを取る。俺もあわてて精神を集中する。

悪靈はすでに周りの生徒は無視して動いている俺と小西さんにターゲットを合わせたらしい。ゆっくりと近づいてくる。聞こえる・・・。彼らの声が・・・。

「たすけて～」「熱いよ～」「痛い！！腕が～腕が～！！」「ママが～！！パパが～！！うわ～ん」「操縦不可能！！うわ～～」「落ち着いてください～～きや～」「いたい、冷たい」声が混じつて聞き取れないものもある。

「でもよ・・・」

俺はかつと田を見開いた。愛華の靈氣を刀に乗せて。

「俺がお前らの魂を・・・」

小西さんも突きを放つた。俺も神速の抜刀した。

「俺がお前らの救われなかつた魂を救つてやる！！」

刀からは白い・・・銀色の波動が繰り出された。レイピアからは青い槍状の光が放たれた。それらは悪霊たちを飲み込み、突き刺す。

「白銀狼斬！」「蒼槍竜兩！」「..」

悪霊たちの最後の叫び声が、時間の止まつた機内に木霊する。そして、死の直前の姿となり、俺達を一瞥し消えていった。

小西さんの隣には激しく疲労している騎士のフイオネがいた。俺の隣には同じく疲労している妹の愛華がいた。前よりは軽そうだが、それでもきついらしい。

「お疲れ愛華。今回も大変な目にあわせてごめんな」

『大丈夫だよ。お兄ちゃんを守るのが私の役目だから』

そうだなつと心の中で言いつつ、笑顔を返す。きっと愛華ならわかるだろう。証拠に笑い返してくれた。

「これから会長に連絡し、事故現場の除霊をしてもらえるように言っておく。佑ちゃんはもう休んでいいよ。時期に時間が戻ると思つから」

そう言い残して小西さんは後ろに消えていった。その後時間は動き出して、一件落着に終わった。しかし俺達は気づいていなかった。

すでに1人魂を食われた人がいたなんてことを・・・。

後日談だが例の事故現場の除霊は花田さんの知り合いの人があつてくれたそうだ。俺達の楽しい修学旅行・・・今後どうなるのか・・・。今はゆっくりと眠りたい。京都まであと1時間・・・。

じたばた騒ぐ//シションハ修学旅行へ飛行機編へ（後書き）

「メント待つてます――――――

ようやく着いた京都。ああ～歴史を感じるな～。

「…」

なんだ??今の悪寒。。。まるで誰かに見られた感じのものだつた。愛華も何も感じていな~いよ~だ。

「一体なんだつたんだ??愛華、今なんか悪霊みたいな奴いなかつたか??俺悪寒感じたんだけど…」

『私は何も見てないよ??お兄ちゃんまさか風邪引いた??』

『どうやら俺の奇遇~らしい。考えすぎか。。。たはは。。。』

「大丈夫だよ。ちょっと疲れただけだから。修学旅行に着たのに風邪で4日も旅館で寝てるだなんて笑えないよ」

『そうだね。楽しい就学旅行にしたいね』

「そうだな。俺は笑って頷く。

『だからいつお兄ちゃん??』

。 なんだか愛華の牛え尾に何かどす黒いオーラがあるんだけれど…

『大人の階段上つちやだめだからね。やるならつてむぐむぐ』

俺はとつさに手で愛華の口を押さえた。周りから見れば空に手をかざす高校生だらう。しかしそれを聞いていた小西さんとフィオネはくすくすと笑っていた。ああ～小西さんに軽く振られたばかりだとこいつの元……。しくしく……。

「どうした？？？神崎。具合でも悪いのか？？」

どうやら空港で壁に手を当てて暗い顔してたから体調不良と思われたのだわ。担任の水谷銀一郎が心配そうに聞いてきた。

なあ～に大丈夫ですよ先生。俺はこれでも鍛えてますから。今のは  
ちょっとと思い出し憂鬱ですよ。よくありますよね、あつはつはつは  
暗くなつたり、突然明るくなるものだから先生は軽く引きながらわ  
かつた、ホントに体調不良なら言つんだぞつと言い残し、持ち場に  
戻つた。

俺達はその後、空港からバスに乗り旅館へといった。なんとも古風な旅館だった。そこには同じ愛知県からの学校も着ていた。相互関係を結んでいる高校の一つ。希望ヶ原高等学院学校だった。中にはこの前あつた女子生徒もいた。あ、もちろん俺以外にも男はいたぞ。かなりキザッタらしいやつだつたけどな。あいつのせいであのくそ守護霊のことを思い出しちまつた！－くそ－－！－

その後は各自自由行動をとった。俺は小西さんとともに自由ヶ原の討手と会合を開いていた。もちろん守護霊も一緒だ。

「改めまして、私は唐沢美野里といいます。よろしくお願いします」

なんとも特徴的なアホ毛がぴょこぴょこ動くのがなんとも萌え～。

そんな俺に抱きついたのは彼女と瓜二つの女の子。

『久しぶりだね、お兄ちゃん』

彼女は唐沢さん・・・じゃなくて美野里の守護霊小百合。美野里の双子の妹だ。どうやら小学時代に悪霊に殺されたらしく。そのとき来ていた、討手によつて守護霊にされたらしい。見分けがつかないほど似ているが、一つだけ決定的な違いがある。それはアホ毛が右に向いてるのが姉の美野里で左に向いてるのが妹の小百合なのだ。何で名前で呼ぶって?? それはだな・・・。

「佑介~」

「うやつて俺にくつこいくるのだ。」んなかわいい高校生がくつついて来たら俺・・・もう燃えしゃなくて萌え死んじゃう・・・。

『お姉ちゃんとお兄ちゃん仲いいよね』

小百合も姉を応援する。俺も最近は心が揺さぶられ始めてるのは事実だ。横からまたもやどす黒いオーラが・・・。

『お兄ちゃん~~~?』

愛華の存在を忘れていた!!

『何で私を忘れるの?~!えーん えーん』

あ~、ひとつ泣き出しちまった。いつなると手が付けられないんだよな。

「大丈夫じゃい?~! レディー。」なんかわいい子を泣かすなんてこ

の男は人間じゃない

キザックタラしい、女たらしのお前には言われたくない。

「君よりは女性に信頼されていると思うよ。君の守護霊だつて僕のコレクションの一つにしてあげてもいいんだよ??もつとも希望ヶ原の女子生徒の心はすべて僕のものさ」

「何言つてるの??私の心はあなたではない別の人にあるの!!ね～佑介～」

あはは～うれしいね～。俺もう幸せ～。

「そんなことより明日からの行動の打ち合わせをしまじょう

小西さんの無機質な仕事モードの声が響く。あ～振られたからな～。ガツクシ・・・。

『こここの旅館は昔自殺した客がいたらしいです

フィオネ??いつの間に調べたの??

『旅行前日までに京都となりで起きた事件・事故などをすべて調べました』

『それなら僕チンもやつたよ

なんだかガキが出てきやがった。こいつはガキに見えても立派な守護霊らしい。なんでも生前はお坊ちゃまだつたらしく、こいつ・・・黒金輝弥の権力と金に惹かれたらしい。こいつも金持ちらしいから

な。

「ふふん、僕の操る式神でちよちよいつと済ませちゃいいんだよ」「ふん、討伐が簡単にいくとは限らないぜ。最近は手こわくなつてきたからな。

「それは君が弱いからじゃないか??君の守護霊は特に強い気がしない。はつきり言って役立たずだね」

「『』……『』

俺は切れた……。頭に血が上った……。いつの間にか俺は輝弥の胸倉をつかんでいた。

「てめえへ、いいたいほうだいじやねえか……。最初に躍らせておいて、最後はドスンと潰すか……。最悪のやり方だ……。そいやつて女の子たちに自分を嫌われないようになし向けていたんだろ……。それをお前はみんなの心は僕に向いてるって言つてるんだろ??くそやろ!! そうやつて悪霊になつた女の子だつているんだぞ!! 泣いてたんだぞ!! お前のやリアk他では最後には最悪の展開が待つてゐるぞつづけは……」

俺は思いつきり小西さん元殴られた。見下したような眼をしていた。

「何すんですか!! ぐは……」

『お兄ちやん……』

泣きながら愛華が俺によつてきた。何泣いてるんだよ……。俺は

平氣だぞ？？

「祐一ちゃん？？」Jは喧嘩をするといひじやないんだよ？？分かつてゐる？？」

なんだよそに言い草・・・。それじゃあ、憑靈化は進む一方だぞ？？それでもいいんですか？？小西わん。

「だからそれをとめるために私たちがいる。違つか？？」

なんだよそれ・・・。それじゃあここいつのやつてゐるJと・・・認めるんですか？？

「これが彼の性格なら仕方あるまい。私は田をつづふりひ

「・・・」めんなさい。私も仕方ないと私は思います

なんだよ・・・小西さんだけじゃなくフィオネも美野里も小百合も・・・

「愛華は？？愛華はどうなんだ？？」

『私も仕方ないと思ひ』

愛華なら俺の味方になつてくれる・・・はずだつたのに。

終わった・・・。俺はがつくつとその場に崩れた。それに合わせて俺はやつに頭を踏まれた。

「これで分かつたか？？俺の力・・・。それは女の子の心を捕らえることができる力なのだ！！」

何それ・・・。ワケワカンね・・・。何??美味しいの??

「そこで転がつてろーー！」

俺は蹴られた。尋常じゃない力だった。どうやらやつは足を奪われたらしい・・・。肋が何本かもつてかれたな・・・。

「俺は認めね・・・。俺は認めないぞ！！そんなの間違っている！」

「『アーヴィング』の『アーヴィング』は、アーヴィングのアーヴィングだ。アーヴィングのアーヴィングだ。

笑い出した??なんだこの悪寒。。。まさか!!

「こはあの時感じたもの!! 誰だ!! 誰がこんなことをしている

ん？？俺の腰には見たこともない刀が。

「『牙狼丸』じゃないな」

『汝・・・力を求めるか？？』

なんだ？？誰なんだ？？

『汝・・・力を求めるか？？』

「...」

当たり前だ……。何判りきつたことを言つんだ……。

『汝……「うるせーーー！」』

俺は吼えた。あまりに分かりきつたことなので馬鹿らしくなったの  
だ・・・。

「欲しいに決まっている！俺は力が欲しい！－！」

『なら・・・何のために・・・』

「！－！」

『貴様の仲間はすでに己の欲におぼれ・・・もがき・・・そして散  
つていた。これまで何人ものやつがそうだった。汝はどうだ？？』

突然試すような口調に変わった。みんなやられただって？？みんな  
つて・・・。まさか！－！

『そんなことよりも貴様が答えを出せれば仲間は救われる・・・』

野郎・・・。

『今再び問おう！－！貴様はなぜ力が欲しい？？』

俺がなぜ力が欲しいのか・・・。何で？？なんで？？ナンデ？？・  
・。とりあえずは目をつぶる・・・。浮かんでくるのは・・・庭？  
？なんだ？？この昔じみた庭は。でもなんだか懐かしい・・・。つ  
と誰か来た。

「またいらしていたの……殿」

「女の人だ。きれいだった。心が奪われるくらい、きれいだった。」

「あなたの笛を聞かせてくれませんか？？」

笛？？

「あなたと共に……に乗つて天を駆けた昨日はとても楽しかったですよ」

空飛んだんだ……。つてびりやつて？？

「あなたの……」

待つてくれ……あなたは一体誰なんだ？？

「また楽しい夜をすぐしましょ」

う……まぶしい……目が開けられない……俺は白銀の光の先にいる男の最後の言葉を聞いた。

「ああ、参りましょう……わへり（……）姫」

「……」

俺はわかつた……。分かつちまつた……。わかつたんだな……。  
（）で3段活用……。空氣読めよコラ……。  
だから（）に誓おつ……。

「俺が守りたいのは小西 桜ただ1人だ~~~~~！！」

突然体が軽くなつたのを感じた・・・。俺は浮いてるのか??無重力つてこんな感じかな??感じたことないけれど・・・。

「汝の誓い・・・確かに受け取つた・・・。貴様にこれを渡そう・・・。いつか使う日が来るだろう・・・。だから今は・・・貴様の心に埋め込んでおく・・・！」

「！！」

突然化け物みたいな声に変わつた！..やばいと思つた瞬間俺は意識を失つた・・・。最後に見たのは白銀の体を持つた巨大な怪物だつた。ああ・・・やつがこれを俺達に仕掛けていたのか・・・。俺は・・・

はつと目を覚ますとすでにベットの中だつた。隣には同じ部屋のやつがグースカ寝ていた。どうやら夢だつたのか??それなら今まで俺は何をしていたんだ??確かに俺達は会合を開いていて・・・一体あれはなんだつたんだ??まあ、明日になればすべて分かるだろう。そう思いつつ俺は再び眠りについた。

// ションエノ修学旅行 旅館編（後書き）

コメント待っています！！！

俺はいつもよりも早く起きて、そりと外に出て、花田さんから貰っていた決壊用の御札を展開して刀の素振りをしていた。昨日のことを愛華に聞くと愛かも同じことを体験し、何でも俺にも裏切られてそこで気を失つたらしい。俺もお前から裏切られたときは悲しかつたぞ。

『私はそんなことないよ。お兄ちゃん、信じて』

そんなに田をウルウルされると首を縦に振るしかできないじゃないか、まったく。

「分かつてゐよ。俺達は信じあつ兄妹だからな」

『うん！…そうだね！…』

はじける笑顔で言つ愛華。俺の中に埋め込まれたものって一体なんなんだ？？

『私にも分らないな。何か大切なものじゃないの？？』

だといいな。今後に役立つものならいいんだがな・・・。その後も俺はさまざまな剣術を試していた。滝のような汗をかいて、朝風呂に行つた。こつそりと混浴に言つたのはみんなに秘密だ。何せまだ5時ごろだからな。ほとんど起きてないだろう。愛華にはいくなと散々文句を言われたが、ここはスリルを味わいたいので俺は行つた。

ガラガラとドアを開けて、腰にタオルを巻いて俺とバスタオル姿の

愛華が入った。中には誰かいる気配がした。

「おせよひ」、「それこます、朝早いですね」

俺は挨拶をしながらその影に近づいたつてブー！！鼻血が飛び出す  
た。だつて風呂にいたのが・・・。

「あ、おはよ。佑ちゃん、昨日はお互い大変だつたね~」

小西さん・・・。あなたつて人は・・・。きらめく白い肌。バスター  
オルで隠れる福与かな胸。上気して赤くなり、かなり色っぽい顔・  
・。俺・・・もう死んでもいいです。

『お兄ちゃん！！エッチな目で見ないで！』

おおつヒマイシスターよ！－これは健全な男なら仕方が無いことなのだよ－－」れを止められてしまつと男と云ひのはだな・・・。

『あなたもやはり男ですね』

ん？？どうしたんだフィオネって小西さんも愛かもなんで真っ赤にして俺を見るんだ？？つてうわ――！――どうやら力説してたらタオルがはらりと取れてしまい・・・。

卷之三

2人の悲鳴がとどろいた。しかし聞こえた人は皆無だつた。この後俺は3人分のコーヒー牛乳を買わされた。体のほうはかなりやばいことになつてたな・・・。

つといろんなことが朝からあつたが今はグループ活動の真っ最中。俺達は最初の目的地、金閣寺に来ていた。

「本当に金ぴかですね~」

関心して言つのはクラスメートの芳賀隆介だ。確かに金ぴかだ。昔は本当に金が使われていたんだろうな・・・。今はそうではないが。

「シャツターチャンス!!」

写真部の芝達也だ。マニアらしく、被写体があればすぐにシャツターチャンスしてしまう癖があり、それにより検挙されることがたびたびある。警察ももうあきれるしかできないよつで、その場で注意して終わらと言つ形が最近であるようだ。

金閣を一瞥して周りを見ると池に移る金閣を凝視する小西さんとフイオネがいた。どうしたのですか?? 小西さん。

俺が尋ねると、いつもの仕事モードの小西さんがつぶやく。

「この池の金閣には悪霊が住み着いている」

本当ですか??なんですか??

『金閣はかなりの資産で建てられたのでしょう、おそらく金に苦しんで死んでいった人々の恨みが住み着いているのだと思います』

真剣な表情で説明してくれるフイオネ。了解。それじゃあそうすればいいんですかね。

『やつらをおびき出すしかないかもしない。しかしこのままでは一般の人にも被害が出てしまつ』

『しかし』のままほうつておけばさうに凶悪な悪霊になる可能性もあります。あの2人もまた別のポイントで戦闘を開始しているようです』

昨日のことは今朝聞いてみたが2人もまた愛華と同じく裏切られた瞬間気を失つたらしい。あ、小西さんは答えたところまでは覚えているがその後すぐに気を失つたらしい。お礼外にも答えを言つところまで行く人いたんだな。

「もう、腹をくくるしかな」よつね。佑ちゃん構えて……」

よし！！了解！！小西さんは懐から御札・・・ではなく4色の色紙でできた人形を持って走つていった。どうやら東西南北に設置しているようだ。人形は・・・竜・鳥・虎・亀だった・・・まさか！――

「4方に宿りし聖獸よ。惡の根源をこの地にひれ伏せさせよ！！北の朱雀！！東の青龍！！南の玄武！！西の白虎！！」

次の瞬間4色の光が金閣周辺を包み込んだ。一般客は驚き逃げ惑う。クラスメートは逃げるどころか氣絶している。唯一芝だけがシャツターチャンスしていた。

地を搖さぶるような咆哮をどろかせ、出現したのは、幾人もの人間が埋められた、獣の形をした惡靈だつた。モデルはライオンか？？でも、埋め込まれている人間からも悲痛のつめき声が聞こえて来る。

「これは・・・」

『レベルBですね』

レベルがどうだか知れねえ画、今までのやつよりは強いということですね？？俺の質問に無言で首肯する小西さん。だったら・・・。

「愛華ーーー！」

『ア解ーーー』

俺は愛華から『牙狼丸』を受け取り、靈氣をまとわせ、構える。小西さんもすでに戦闘準備完了だった。愛華と違い、騎士のファイオネもある程度は戦えるのだ。

悪靈から感じられるどす黒いオーラを感じ冷や汗が流れる。ぴちゃんと俺のほほから流れ落ちた汗が地面についた瞬間俺達は駆け出した。

「俺がお前らの魂を救つてやるーー！」

金閣での戦闘が今始まつた・・・。

どがん どがん どがん

悪靈が吐き出す漆黒の炎をかわしつつ、刀に靈氣を纏わせ、悪靈を切る。切られるたびに悪靈は奇声を上げ、人々は昇天していく。しかし斬つても斬つても中からは人間の形をしたものが出でてくる。どれだけ金に苦しんだ人がいるんだ。

「小西さんーーー」いつは一気に全体をぶつ飛ばさないといけないんじゃないか？？」

「そりだね。やるしかない……！」  
『 フイオネ！』

『 分かりました』

小西さんはフイオネが合わさったレイピアを持っていた。俺も愛華の靈気を半分刀に流し込み、抜刀の構えを取る。周りにはすでに非難したのだろう、人は誰もいなかつた。悪靈は俺達を睨みながら攻撃態勢に入つていた。『 溜技だ！！』

ここからは力と力の勝負だ！！

「白銀狼斬！－！」 「蒼槍竜爾！－！」

俺の刀からは銀色の波動が地面なげずりながら、小西さんのレイピアからは青い槍状の攻撃が悪靈に向かつて飛んでいく。悪靈も口からどす黒い炎を吐き出した。攻撃同士がぶつかり合い、閃光がありを照らす。

「 うおおおおおおおおおおおお」

かた　かた　かた　かたと刀とレイピアが唸る。少しづつ足が押されているのに気がついた。俺達は押されているのか？？

『 お兄ちゃん！－』

心配無用だ！－！お兄ちゃんは負けない！－！そのとき俺の心臓が何かがドクンと大きく鼓動したのが感じられた。何かが俺の中に流れ込んでくる・・・。

『 汝・・・我を求めるか？？』

あのときの怪物か??

『いかにも、汝にはすでに守護霊がいるので我是具現化されない』

そんなことよりも力を貸してくれるのか??

『汝は我の主なり。汝が必要となればわれの力、今はわずかだが、貸すことは可能だ・・・』

よしーー! それなら俺にお前の力を貸してくれーー!

『よかうづ・・・。我的力しかと汝に渡した・・・』

といひでお前の名前はなんていうんだ??

『我是白銀の竜王なり。名はまだない』

なら、ギンでいいかな?? 呼びやすいしな。よろしくギンーー!

『よかうづ、我的名はギン・・・。我是汝とともにここに・・・』

刀に纏わせている靈氣があがつたのを感じた。愛華だけではなく、ギンの靈氣も含まれているらしい。これなら何とかいけそうだ。俺は直感で感じたやり方をとる。

「人の闇より生まれ、人の心を食らうもの、陰と陽との調和のもとに、我が描きしら望星によりて無に返す、惡靈滅すべし!!」

俺は刀で5望星を描く。そこには白銀に輝く星が出来上がった。そして上段に構えたまま、振り下ろした!!

「封星龍破！！」

星の中からは白銀の龍が現れ、悪霊を食いつぶしていく。悪霊は今までにない悲鳴を上げて、最後のひとかけらも残されずに龍に食われた。

『お兄ちゃん、いつの間にそんなことができるようになったの？？』愛華が感心しながら聞いてきた。お兄ちゃんもぶつつけ本番でやったんだよ。直感でやつかな・・・。

「それならす」ことこうしかありません

小西さん？？

「龍は聖獣の一つ、青龍をあらわします。あなたがそれを操ったことは何か理由があるので？？」

確かにあつたつちやあつたんだが・・・。眞つていいのか？？

「ないよつながらば才能でしようか・・・。しかし大変なことになりますね佑ちゃんも」

なんでだ？？俺は今でも大変だけれども。

「強大な力を持つ討手は政府直属の機関に配属されるのです」

配属？？政府直属の機関？？なんすかそれは？？

「それのことならば、学校に戻り次第、会長じきじきに教えてくれると思うよ。がんばってね佑ちゃん」

何と言づか・・・また大変なことに巻き込まれそうだ・・・する  
と俺の手元でピキピキと何かの音がした。見てみると・・・  
「な・・・なんだと！－！」

『お兄ちゃんこれって・・・』

俺の愛刀・・・『牙狼丸』にひびが入っていたのである・・・。こ  
れは・・・どうしようか・・・。俺はただ見つめることしかできな  
かつた・・・。

//シヨンエノ修学旅行 金閣寺編（後書き）

「メント待つてますーー！」

俺達は今清水寺に来ている。『牙狼丸』にひびができちまつたからには小西さんにかなり負担かかっちゃう。それも俺が弱いせいだ・。・。くそ！－俺は近くの木を叩く。愛華はそれを心配そうに見てくる。そつとしておいてくれるのは彼女なりの気遣いだろう。小西さんも気にするなといってくれた。フィオネもそうだった。

「しつかし高いですね～」

「エエから部で飛び降りれるかな？？」

おつかないこと言わないでください。あれは昔話ですよ。それにしてもここにも悪霊がいるんですか？？

「なんでも落ち武者が集まってここで大量自殺したことがあるらしい、その靈が最近になつて活発になつてているんだ」

具体的には？？

『エエ』で自殺する人が増えてるんです。今年に入つてもう二〇名。なんでもなかつた人が突然体調を崩すところから始まるらしく、そこから坂を転がるようなものですね・・・』

「それも悪霊たちのせいなんですね？？」

「そつ、彼らは仲間をあつめている。一体何をしようとしているんだか・・・」

愛華は何か感じるか？？

『特に何も感じないね。守護霊たちも疲れてる。相当悪霊の力が強いんだね』

『悪霊が守護霊に変わつて後ろに付くために自殺者が現れるのです』  
それなら早く何とかしなきゃな。罪もない人が夢を奪われていく・・・。  
・。そんなのはだめだ！！

『愛華も頑張るよー！お兄ちゃん』

おっし、期待してゐぜーーー愛かはえへへと屈託もなく笑つた。

「それでは術式を組み立てます」

そう言つて手に試算はいつもの悪霊を呼び寄せる術式を発動した。

ドカーンーーー

大きな爆発音が響く。どうやら下かららしい。来訪者はあわてて逃げ出している。同級生の姿もいる。何とか無事でいてくれよつて・・・ん？？なんだか生徒たちの中になにやら変な感じを持つ奴がいたな・・・。気のせいが？？

「佑ちゃんーーー来るよ」

おっしーーー『牙狼丸』もつ少し頑張つてくれよ。刀はカタカタと弱弱しく動いた。愛華ーーー

『オッケーーーー』

愛華の正の靈氣をまとわせる。まだ大丈夫そつだな・・・。でも龍の力は使わないほうがいいな・・・。

「あちらから援軍が来るようだよ！―それまで頑張ろう！―」

分かった！―といひでこいつのレベルは？？

「こいつらは・・・レベルDだが多すぎる！―なんて数を集めてるんだ！―」

いちいち気にしてても仕方ねえな！―俺はは知つて悪霊たちの群れに突っ込んだ。

「俺がお前らの魂を救つてやる！―」

切つて切つて切りまくる・・・。倒しても倒してもきりがない。次から次へと集まつてくる。まるでゾンビだな。

「蒼槍竜雨！―」

小西さんは方で息をしながらもレイピアを振り続ける。威力は落ちるもの範囲は変わらない。連射して何とかしている。それでも限界が来る・・・。俺も使いたいことは山々だが折れてしまつたら・・・。そんなことしてるうちに俺達は落ち武者たちの攻撃で切り傷だらけになる。血を流しすぎた・・・。意識が朦朧とする・・・。援軍は？？まだなのか？？

「痛い・・・痛い・・・」「戦は・・・終わった」「最後まで殿に忠誠を・・・」「なんでこんなことに・・・？」

「成功までもう少しだったのに・・・なんでこんなとき」「体調が・・・」

声・声・声・。悪霊たちの生前の声。悲しんで死んでいふ。これは悲しみの舞台・。きらりと光るもののが飛んでくる・。俺達はそれが何なのかを確認できない。悪霊たちによつて押しつぶされ、そこからせいいの靈気を奪われているのだ。愛華はどうやら必死に俺を助けるとしているようだ・。何やつてんだ・。俺はこれで・。・。

『終わるのか？？』

ギンか・・・。もう頭にポジティブが浮かばねえ・・・。

『負の靈氣に負けるなんて・・・それでも守るといつて者の姿か?

助ける・・・たすける・・・タスケル・・・。

そうだ・・・。俺は言つたじやないか！－小西さんを守ると－－

卷之三

俺は残っていた力をすべて刀にこめた。さらにギンの力もこめて・  
・。そして叫ぶ！！刀が折れようが砕けようが愛する人を失うほ  
うが辛いんだ！！

「封星龍破！！」

銀色の龍が悪霊たちを食らっていく、刀がきしむ・・・もつてくれ！－ギンでも殺すのに時間がかかる。俺達に地価空く悪霊たち。しかしそこに来たのは。

「風魔の矢！－！」 「式神・ヤマタノオロチ！－！」

唐沢美野里と黒金輝弥だった。助かった！－！

「（めんなさい）－！」 どちらでも苦戦したもので

「僕は余裕だつたよ。小西桜君を助けについて氣絶してゐる」

バーカ。何一人でうなだれてやがる。やつこひつてゐつちに俺のギンと美野里の矢、そして輝弥の式神によつてすべて昇天させた。

「小西さん？？大丈夫ですか？？」

俺の問い合わせにも答えない。どうやら本氣で氣絶したらしい。靈氣取られすぎたのかな？？

「お疲れ様です。吉川さんには私から連絡しておきますね」

スマセンね、何から何まで・・・。

「いいんですよ、あなたたちが傷ついてしまったのは（うちの援軍が遅れたからなのですから）

でもきてくれたからいいんじゃないですか？？

「それは助かったからいいですけれども、もしかするとあなたたちは殺されていたかもしれないんですよ？？それでもいいとなんてい

えるんですか？？」

それは・・・その・・・。

「そこまであなたが気を使う必要はないんですから。あなたに今し  
なれると私たちが大きな責任を負わなければいけなくなるんですか  
ら」

大きな責任？？

「あなたはこの修学旅行の後専属機関『ガイア』にはいる人なんで  
すから」

『ガイア』？？そついう名前なんだ。

「『ガイア』は最強の討手たちの集まりだ。手をぬぐと殺されるぞ  
？？お前のようなひょろひょろはすぐに死ぬ」

そうかい・・・。忠告ありがとうございます。

「へつー！」

「それよりも小西さんはどうする？？フィオネも力尽きたやつたら  
しいし」

俺がおぶりますよ。大丈夫です。俺は力ありますから。

「そう？？それじゃあよろしくね」

そうして俺達8人は清水寺を後にし、最も危険な清明神社に向かっ

た。俺の刀はもう限界だった···。

//ショションエノ修学旅行 清水寺編（後書き）

コメント待つてます！！

## //ショショーン修学旅行～清明神社編//

バスやら徒歩でやつてきたのは清明神社。同級生とはばぐれてしまい、電話でどうせならもう自由行動してしまおうということになり俺達8人は清明神社に来ていた。相変わらず小西さんは気を失つたままだ。中には多くの観光客がいて賑わっていた。

「こなんとこにも悪霊が住み着いてるのか？？」陰陽師がいたところだろ？？」

「確かにそうですね。ここに悪霊はいますがそれは封印されたものです」

「封印？」

「ああ、安部清明が命を賭けて封印に成功した悪霊がここ清明神社にいるらしい」

『僕チソが調べたんだけどね、あそこにある大きな岩に封印されるらしいよ。岩に色々と御札が張られてるからね。でも長い年月をかけて毎回貼られていた御札も陰陽師がいなくなつてからはお粗末にされてるらしいよ』

『だからいつ封印が解けてもおかしくないの。それももうすぐとかれる可能性もある』

『どうしてそんなことが分かるんだ？？』

「あれを見てみろ」

輝弥の言葉に俺は振り返る。机に張られているのはたった一枚のぼろぼろの御札。

「あれが剥がれたら・・・」

『わかつと幽霊が復活する・・・・お兄ちゃん』

愛華が不安そうな顔で言つてくる。やつだな、何とかしなきやな。

「それにしてもどうするんだ???

「やめようと一つだよ」

「あれをばがして俺達が殺すまでよ」  
あっせりと恐ろしいことを言つてくれますね。そんなことが可能な  
のか??あの清明でさえ命賭けたんだろう??そんやつに俺達ガキが  
かなうのか??

「俺達はこのために来たんだ」

「怖いんだつたらそこで見ててね。私たちでやるから」

なんだよ・・・。お前ら怖くないのか??死ぬかもしれないんだぞ  
!!

「怖いやーー逃げ出したくなるくらいにな!!それでもやらなければいけないことはあるんだ!!それをいい加減に見極めろ!!それでも力を持つものなのか??お前は俺達の持つことができない龍の力を持つ。そんな力があったなら俺が『ガイア』に入ってるぜ!!

お前は今みすみす倒すチャンスを逃し、多くに人たちを悪霊化させる気なのか？？どうなんだ神崎佑介！！」

『お兄ちゃん・・・』

愛華は俺の傍にいてくれるか？？怖いんだ今めちゃくちゃ。。。

『私はお兄ちゃんの守護霊だから当たり前だよ』

そうか・・・。ありがとう。それなら俺がやることは初めからそれしかなかつたつてことだよな。

『汝力を求めるか？？』

くれよ力を・・・。この世界の人々を守るための力を・・・。そして愛する人を守るための力を！！

ピッシャーン！

突然晴れていた空に雷雲が現れ。狙つたかのような雷が封印の岩に激突した。そして悪夢の始まりだった。

「封印の御札が……」

炎で焼かれて灰になつた・・・。そしてこの世の叫びとは思えない声が響き渡る。観光客は驚き逃げ惑う。そして岩が崩れ下から現れたのは鎖につながれた大きな鬼だった。

ଗୁଣ କାଳ କାନ୍ତି ରମେଶ

鬼は叫び声を上げて、封印の道具の1つだろうか、鎖を力任せに引

それがやれりつとしていた。

「こくわよーー。」

『了解ーーお姉ちゃん』

美野里の声に反応する守護霊の小百合。光り輝く弓矢と同化した。彼女は鬼に標準を合わせて矢を放つ。

「炎魔の矢ーー。」

矢が刺さつたところから紅蓮の炎が噴き出し鬼を焼いていく。

「俺も加勢するぜーー。」

『僕チンもやるよーー。』

輝弥とその守護霊の裕が鬼の前に立つ。

「式神・狼ーー。」

紙から出てきたのは真っ黒な狼だった。それは鬼に向かって突っ込んでいた、首の辺りを噛み切った。

「おおおおおおおおおおおお」

どうやらあの鎌でほとんど力が制限されてしまつてゐるらしい。今回は楽勝と思っていた。俺達6人は。。。

正直に言おう・・・甘かった・・・。清明神社には俺と輝弥しか立

つていなかった。先ほどまで一緒に戦っていた美野里は精神力の限界で倒れてしまった。俺の刀もすでに折れる寸前。輝弥の式神も次々と破壊されていく。

「くそ！..強すぎる！..」

輝弥がとうとう痺れを切らした。落ち着け輝弥！..こんなところで切れてたらやつの思う壺だ。

「バカいってんじゃねえ！！あいつの封印は完全に解かれちまったんだ！！あんな強力なやつはな、封印がまだ聞いているときに一気に倒さなきゃいけなかつたんだ！！」

俺達の力が足りなかつたのか？？

「そうだ・・・。俺達だけで倒せるレベルじゃなかつた・・・レベルAだなんて・・・」

『輝弥！..僕チンももう長くは戦えないぞ！..』

「分かつてる！..もう少し付き合えよ裕！..』

『承知した！..』

そう言って再び式神を召還する輝弥。しかしすぐさま爪で切り裂かれて消されていく。

「くそ！..！」

俺も靈氣をともわせた刀を構えて特攻をかける。きしきしと刀が泣

いているのが感じられる。痛いだらつ……「めんな……。

「おおおおおおおお

俺は思いつきり刀を振り下ろす。ガギンと硬い体に阻まれる。もつ何度もだらう。美野里の『矢も刺さらないくらいの硬さ……。絶対防御……。清明はどうやって瀕死に近づけたんだ??

『お兄ちゃん……』

俺が愛華の言葉に気づいたときには俺はすでに宙に舞っていた。どうやら腸を切られたらしい。鮮血とともに木の葉のように舞、そして地面に叩きつけられた。

「佑介……」

輝弥の声が遠く聞こえる……。ああ……輝弥も殴られたようだ……。俺達負けるのか……。

『お兄ちゃん……』

愛華……俺もそつちに行ぐのかもな……。

『汝……我とともに生きぬのか??』  
ギン……俺だつてまだ負けたくないぞ……。でも……。

『汝……まだ我的力を行使してぬ』

あれを使えば刀が……。

『お兄ちゃんは怖いの？？刀がなくなることがそんなに怖い？？みんながいなくなるやり怖いことつてあるのかな？？』

愛華・・・？？

『お兄ちゃんは刀をもつと信用しなよ。それはお兄ちゃんが思つてるよつも頑丈だよ』

信じる・・・？？

『汝・・・我の力を使え』

みんながいなくなれば戻つてこない・・・2度と・・・。刀はどうだ？？そりや・・・こいつは俺にとつて最高の相棒だ。ただの武器じゃねえ。でもこじでかばつて戦えば確実に殺される・・・。俺には選択肢はこれしかないのか？？

『あつはつはつは。これは久しぶりに面白い少年に会いましたね』

誰だあなたは・・・。

『あつはつはつは、これわこれわ遅くなりましたね。わたくし陰陽師安部清明と申します』

清明だと…なんで？？あなたは死んでるはずじゃ・・・。

『これは私の記憶です。あなたは何でも記憶を見る力があるらしいですね。あなたの守護霊たちが教えてくれましたよ』

記憶か…ここつは確かにあんたが封印したんだよな。

『ええ・・・何人の弟子を失いながらも何とか封印をすることができるたという怪物です。今思つと弟子たちには本当に申し訳ないとをしたと思つています』

あいつの弱点とかはないのか??何でもいいんだ!!教えてくれ!!

『・・・』

なんで何も言わないんだ!!」のままじゃみんな殺されちまう!!そんなのは嫌なんだ!!

『守りたいという強い心・・・それがあなたに更なる力を与えてくれるでしょう』

それだけか??というか弱点じゃないだろ!!

『私からはそれだけです。あなたならできるでしょう。また後で会うことができる这件事を祈っていますよ』

おい待つてくれ!!おい!!清明!!俺は再び現実に戻された。目の前には鬼が立っていた。あたりには倒れた仲間たち。立っているのは俺だけらしい。

『お兄ちゃん・・・』

すまないな愛華。俺にはまだやれる感じ。

『当然だよ。なんだつて私のお兄ちゃんなんだから』

あはは、ありがとう。それじゃあこっちよ派手にやりますかな!!

「ギン！－いくぞ－！」

俺は再び刀を片手に構える。放てるのはたった1回。それも渾身の力をこめたもの。

「人の闇より生まれ、人の心を食らうもの、陰と陽との調和のもとに、我が描きし<sup>5</sup>望星によりて無に返す、悪靈滅すべし！－」

唱えているときも銀の冷機をまとつた刀がきしきしと鳴っていた。俺は刀で<sup>6</sup>望星を描く。そこには白銀に輝く星が出来上がった。そして上段に構えたまま、振り下ろした－！

「封星龍破！－！」

ドクン！－！

なんだか変な感覚を心臓付近に感じた。それでも放たれた俺の渾身の攻撃。具現化されたギンが鬼に向かつて突進する。

『ぐおおおおおお』

「ぎこいいあああ

ギンの牙が鬼に突き刺さり、鬼の爪がギンの体を切り裂く。激しい守護靈と惡靈の戦いが繰り広げられる。

「ここつはおしつねられつだな

ギンと鬼の体は傷だらけでぼろぼろだった。

『お兄ちゃん……止めを刺すならいまだよ……』

『汝……いつを討伐せよ……』

サンキューギン、愛華。俺は愛華とギンの靈氣を一重にまとわせ、かつてない靈圧を伴つた刀を持つて神速の速さで鬼に近づく。

「ぐあああああ」

鬼のほうも近づいてきた俺に気がついたらしく、ギンが体でブロックしているため身動きが取れない。俺は宙に舞いそして鬼に向かって渾身の抜刀を繰り出す。

「うおおおおおおおお」

みんなを守る力を！…愛する人を守る力を！…

「へりえ！…滅悪龍炎！…」

俺の刀からは銀色の炎が噴き出し鬼を包み込むそして…。

「刀を突き立てれば…」

終わりだと俺は言おうとしていたのだが…。何者かに殴り飛ばされた。

「なんで…・…どうして…・…」

俺の目の前にいたのは…。

「なんでなんだよ・・・小西さん（・・）」

俺のことを殴り飛ばしたのは小西さんだった。でもいつもとは違った。体の回りには黒いオーラをまとっている。そして俺の問いかけに反応し振り向いた・・・。

「佑ちゃん。『苦勞様』

小西さんではなかつた・・・額には血の様に真っ赤な石をはめ込み、耳まで裂けるように口をにやつとさせて笑つて見せる。

「『』のこの力がどうしても欲しかつたの。だからみんなが死に物狂いで封印までもつて言つてくれるまで待つたわけ。そしてこの子の力を私の体に取り入れる」

『汝・・・何者か？？』

『何だと？？』

「なんだいもう忘れちまつたのかな？？」

「あんたの『』主人様を殺したのは私だよ」

『貴様・・・』

何のことだかさっぱり分からなかつた。俺は愛華を探すと愛華は倒れたフイオネのもとに行つていた。どうしたわけかフイオネの姿が透けていた。俺も急いでそこに向かう。

「どうしたんだフイオネ！？」

『私はあの人的心にすむ怪物に氣づくことができなかつた……。  
それだけが心残りです』

「何死に行くようなこと言つてんだよーー。」

『私の靈氣はすべてあの怪物に食べられました……。もういいとじまることはできません』

「お前はどうに行くんだ? ?」

『天国だよ……お兄ちゃん』

「愛華……」

『私はもう一度転生します。転生したときに皆が幸せになつていることを祈っています』

「おい……死ぬな……」

『お願いします……。人の心は闇に飲まれています。助けてください……』

「分かつた!! 助けるからお前も生きろ!! ……」

『わたしはもう死んでいます……。ここから離れるだけ……』

フイオネはゆっくりと消えていく。そして最後に。

『信じてこまか』

セツヒテ泣えていた。・・・。

「うおおおおおおおおお

俺は小西さんに向かつて刀を向けた。小西さんを助けるためこー！  
しかし・・・。

「だいじめに」

「なーー！」

ばきんーーと俺の刀が折られた。小西さんは真っ黒な刀で俺の『牙狼丸』の刃を斬った。渾身の靈氣をこめていたにもかかわらず・・・。小西さんの刀にあるどす黒いオーラが上回つたらしい・・・。

「く・・・くそーーー！」

俺は倒れた体を起こし再び走ろうとしたが。  
「『牙狼』は『牙狼』じへ地面に転がつていろ」

やつひて空中に刀を向けてから下に振り下ろした。

「黒雨封槍」

「ぐあああああ

俺の四肢には黒い槍が突き刺さり身動きができないよつこある。あまりの痛みに俺は悲鳴を上げてしまつ。

「さあ、かわいい子。私と今一度ひとつに」

『貴様……』ロス……』

「ギン……」

ギンが小西さんに特攻を仕掛けた。しかし……。

「主人とともに戦わない貴様に恐怖心はない。今は消えていてもらおう」

刀を横一線に振るう……。

「黒半月斬……」

どす黒い半円状の衝撃はがギンにぶつかった。ギンはそのまま真つ一つにされ消えてしまった。どうやら靈氣をほとんど失ったからなようだ。そして小西さんは再び鬼と対面し。

「私と一つに」

俺は信じられないものを見た。鬼が小西さんの体の中に吸い込まれていっているのだ。あの巨大な鬼があつといつ間に吸収された。そのとき俺は場の雰囲気が更に重くなつたのを感じた。愛華も立つていられないようだ。負の靈気が場を支配しているらしい。

「私はこれから蒼陽市に戻つて計画を実行するから」

さらりと自分たちの計画をばらす。

「そんなことをばらして何の意味がある……お前らにとつて不利に

なるだけだぞ！！」

「心ざかぬなーーお前は誰だーー小西やんを返せーー」

「あはははは、それはかなわないね。この世界を破滅の世界へと  
変える・・・。そして私はかつて藤原さくらに取り付いた悪霊・・・」

「神崎？？」

俺が戸惑つて いる ゆりくひと やつは 消え ていこうとした。

「待て！！小西さんを返せーーー！」

俺がいくら叫んでもやつは笑いを辞めない。

「貴様もやつと同じ運命をたどる。愛する者も救えない・・・そんな運命を繰り返すのだ!! はーはっはっはっは」

「おしゃべり会」

黒い空が快晴に変わると同時に俺は体を動かせるようになった。あたりは戦闘で悲惨な状態。そしていつの間にか夜になっていた。

どうやらほかの2人が目を覚ましたらしい。大丈夫か？？

「うん」

「うふ。なんとか」

「ああ、ついでやつぱりした？？お前のつれもいなし

やつは小西さんに取り付いていた憑霊に取り込まれた・・・。

「「「」」

2人は驚き、信じられないといつ顔を下がかまわず俺は続ける。

「やつは今蒼陽市に向かっている。それで世界を新たに創造しようつ  
とじてこりし・・・・・」

「そんなことができるのかな？？」

「できるからやつとじてるんだよ」

「ああ、でも一体どうやってやるのかは分からなかつた」

「しかしやつまで分かれば悪霊たちとの最終決戦は近いんだな」

「やつだね。そのためにはもっと強くならなくやつ」

「俺はこれから『ガイア』にはいるんだよな。俺はまだ別の立場に  
立つけれども」

「心配するなひょひょひょ。俺達はそれでもともに戦った仲間だ。  
これからもな」

「ああ、口が悪いのは気に食わないがな

『「さつてろクソヤロウ」

『それよつお兄ちゃんの刀、どうあるへへ』

「「「あ・・・」」

俺は重要なことを忘れていた。あの野郎に刀折られたんだった。どうしよう〜〜〜〜〜

『すいませんがお話よろしいでしょうか??.』

俺達が振り向いたそこには。

「安部清明・・・」

『「ひこう」と笑う清明の姿があった。

//ミショニエ修学旅行～清明神社編～（後書き）

コメント待っています！！

## //ショショーン修学旅行へ神崎家の過去へ

俺達は清明神社の中に案内された。いつもは中には入れないらしいが特別らしい。そして嘗て清明が使っていた部屋に案内された。そこには古びた巻物やら掛け軸やらがたくさんあった。

「すごいですね~」

歴史が好きな美野里さんが興奮しながら見て回っている。

「確かに保存が利いているから、ちやんと嘗てのままだ

感心してこる輝弥。俺達は座って式神に出されたお茶をすすついた。

「俺達に話したいことってなんですか??」

俺は清明に聞いてみる。

「あの少女とあなた方兄妹についてです

「俺達との関係??」

『どうぞひとつですか??』

「私が生きていた頃です・・・私の友達に神崎清信かんざきせいのぶというものがいました。彼はいつもある姫に野本に通つては得意な笛を演奏していました。その姫こそが藤原さくら・・・」

「あの時出てきた名前だ・・・」

「聞き覚えがあるんですね。それはギンと契約したときですね」

「なんで分かるんですか？？あなた方は似ているからですよ。先祖とね」

「・・・」

「そして清信には妹がいました。神崎千晴・・・。容姿端麗、才色兼備。見事なまでの女性でした」

「俺と愛華みたいなものだな・・・」

「そして千晴殿は清信殿に恋をしていました」

『まんまだね』

「ああ・・・」

「しかし、清信殿はさくら姫にしか眼が行つていなかつた。ギンに乗つて空を飛んだりするのは日常茶飯事でした」

「俺と同じだな・・・」

『お兄ちゃん・・・まさか・・・』

「ちょっと待て愛華ーーー！」は話を聞こひではないかーー

「千晴殿の心にはさくら姫に対する恨みが募つて行きました。大切

な兄を奪われてしまつと・・・。そして決定打になつたのが彼らの結婚でした。藤原家は最初は渋つっていましたが、数々の戦いで多くの活躍を治めた清信殿に押し切られた形で結婚を認めたのです。まあ、最後は太鼓判を押されたのですがね・・・」

「それで・・・?？」

「結婚式の当田・・・事件は起きたのです・・・」

「・・・」

『何が起きたんですか??』

「千晴殿がさくら姫の魂を悪霊たちに売つたのです・・・」

「なんだつてーーー！」

「マジかよ・・・」

「そんなことができたんですか??」

「千晴殿は昔から祈祷術が得意でしたから・・・術式を組み立てさくら姫に襲わせるようにしました。そして会場はひどい状態になりました。最悪のことにつきさくら姫に取り付いたのが悪霊に心を食われた千晴殿でした・・・」

「なんてことだ・・・」

「あまりに強い悪霊を呼び寄せてしまい、自らでは制御できなかつたのでしじゅうな・・・。封印を余儀なくされた清信殿はその日から

3日3晩戦い続けました

「人間業じゃねえな・・・」

「清信殿はたださくら姫と千晴殿を助けたい一身で銀とともに戦いました。あふれる悪霊たちをギンが喰らい、清信殿が悪霊化した彼女と戦いました・・・。そしてギンが力尽きながらもすべての悪霊を喰らい・・・。清信殿は自らの魂を刀に転生し彼女たちを救いました。そのときの悪霊が2度と出ないよう『壊魂石』という赤い石に封印して・・・」

「その後はどうなったんですか??」

「さくら姫と千晴殿は助かりました。しかし清信殿は魂を消費しそう結婚した後数ヶ月でなくなりました。その後ちゃんと子供は生まれたそうです。その子が生まれなかつたら君たちは生まれなかつたんだよ」

「そうですか・・・」

『ですね・・・』

「これが私が知っている神崎家の過去だ」

俺は何も言えなかつた。あれは俺のご先祖様が命をかけて封印した悪霊だつたなんて・・・。

「ところどころの刀どうにかなりねえかな??」

「あーー忘れてたー!!」

俺は急いで折れた刀を鞘から出した。

「これは派手にやられましたね。それにすでに寿命来てますね」

「ギンの力を使つたときにはビビ入つたんです」

「もともとこの刀ではギンの力は耐えられないんだよ。もともとギンを使いこなす刀はこの世に一本しかないからね」

「あるんですか??」

俺は身をのりだして言つ。

「君がギンに認められた人間だからね。きっとこれを使いこなせるだろう。君の『先祖様の魂が脈々と受け継がれているこの刀』の名を『桜一文字』。僕にも抜けなかつたこの刀。君なら抜けるだろう」

俺は清明から受け取つた。この刀はなぜか俺の右手にしつくり来る。まるで俺の手と一体化している感じだ。

『お兄ちゃん・・・抜いてみれば??』

「そうだな・・・俺は立ち上がり、鞘と柄に手をかける。そして・・・。

「抜けた・・・」

なぜ抜けないのかと質問したくなるように滑らかに鞘から刃が出てきた。銀色に輝くその刀には飾りとして柄に桜という文字と花びらが彫られていた。

「さすがだ・・・今日まで待ち続けてきた甲斐があったよ」

清明も嬉しそうだ。俺は少し力を入れてみると、刀の刃にギンの力が付加された。銀色の靈氣をまとっていた。

『きれいだねお兄ちゃん！』

ああ、そうだな。

「これで清信殿との約束を果たせたよ」

「約束？？」

「氏の魔ぎはに俺の子孫にこの刀がふさわしいものが現れたら渡してくれとな。そのときあいつが現れるといつていた。の方は今回のことを見していんだ」

「今度は俺がやる番なんだな・・・。でも先祖のよつこはならねえ」

『お兄ちゃん？』

「俺は死なない！・・・そしてみんなと幸せになるんだ！」

『そのためなら俺達も協力をさせてもらひます』

ありがとつ輝弥。

「私も頑張るよ！』

ありがとうございます美野里さん。

「私は少し眠りますかな。またあなたたちと会えることを楽しみにしていますよ」

「色々ありがとうございました」

「健闘を祈る」

そう言って清明は消えていった。

「よし行くか・・・」

「ああ・・・」

「やうだね・・・」

「最後の決戦の土地・・・蒼陽市に――」

俺達はその後宿舎に帰り次の日も残りの修学旅行を楽しんだ。小西さんの存在はみんなから消えていた。そしてもう一人も・・・それに気がつくのはもっと後になつてからだった。

//ショーンの修学旅行～神崎家の過去～（後書き）

「メント待つてます！！」

**悪靈討伐部隊『ガイア』へ（前書き）**

いよいよ新展開突入！！

## 悪靈討伐部隊『ガイア』へ

俺達は修学旅行から帰るとすぐに生徒会長に呼ばれた。教室に行くとそこにはスーツ姿の男性と俺と尾ないぞ死くらいの女の子がいた。黒髪で肩まで切りそろえられている、10人中9人が振り向くかわいさがあった。残りの1人はゲイだからな・・・。そんなこんなで俺は説明を受けた。

「あなたが龍の力を持つ神崎佑介さんですね？？」

「はい、そうです。

「わたくし政府直属組織『ガイア』のリーダーをしています、赤坂悠一と申します。以後よろしく」

よろしくお願ひします。

『私は愛華といいます。お兄ちゃんの守護靈です』

「かわいらしい妹さんですね。かわいそつに、輝かしい未来があつただろうに・・・」

ほかの人にそんな道を歩いてほしくないから俺達は今戦ってるんですね？？

「そのとおりです。分かってくれていて嬉しいです。あなたたちは京都奈良での討伐に感謝しなければいけませんね」

それでも封印に失敗したのは俺です。しかも最悪な敵絵および寄せ

て しまった・・・。

「それは遅かれ早かれ起ることでしたから仕方ありません。今後はその被害を最小限に食い止めることが大切なのです」

そのために俺を組織に入れるんですか??

「聖獣の力が必要不可欠だからです。あの悪霊を倒せるのはあなたを含め4人だけです」

そんなに強いんだな・・・あの悪霊。畜生・・・小西さんを乗っ取りやがって!!俺はバンと机を叩く。

「落ち着いて佑介くん。まだ桜が死んだわけじゃない・・・」

そうですね・・・すいません会長。

「詳しいお話は皆が集まる社の方でいたします。車を用意しますので乗つてください」

分かりました、行くぞ愛華。

『ラジヤーーー!』

「佑介くん・・・私がついていてあげられるのもここまで。後はあなたたちの力で頑張りなさい。私たちも誠意バイ援護するから」

ここまでやつていただいただけでも感謝し切れません。またみんなで生徒会の仕事・・・もちろん学校のほうですけれどもやりましょうね。

「そうね。できるように頑張りましょう

『少年よ、お主には力がある。あとはそれを引き出しきれるかは何かのために戦っているかじや。わしからのアドバイスはこれぐらいしかできん』

これだけでも十分答えたよ。ありがとうハク・・・。それでは行つてきます。そうして俺達は車で社まで移動した。

「こちらです」

ガチャリと開けられたドアの向こうには大勢の人々がいた。ざつと見て10人くらいか?狭いから多くいると勘違いしたのか。それでも俺みたいな高校生は4人しかいないな。後は皆大人だ。

「こちらが龍の力を持つ神崎佑介君です」

神崎佑介です。皆さん之力になれるように頑張りますのでよろしくお願いします。俺が挨拶するとほかの人もよろしくと返してくれたのでファーストコンタクトは成功だった。すると3人の少年少女が俺の前に現れた。

「俺の名は魅車圭吾だ。俺の相棒はこのスナイパー・バルドだ。俺の目になつてくれている。お前と同じ力・・・朱雀の力を持つている。これからよろしく」

『・・・ミロシク』

よろしくな、圭吾にバルド。

『私は妹の愛華。お兄ちゃんの守護者だよ』

「愛華ちゃんか、よろしくね」

圭吾は愛華と仲良くなれたようだ。

「私は須藤紗江子。」の子は私の右腕となってくれて居る佐代子。私のお姉ちゃん。私は田虎の力を持っています。これからよろしくね

よろしく。

『よろしくね』

『妹がお世話をになります。よろしくしてやつてください』

「お姉ちゃん、そこまで私つて頼りないのかな??」

『あなたはすぐに突つ込む癖がありますからね。それが心配で心配で』

あはは、そんなときは俺達がカバーしますよ。なあ、圭吾。

「ああ、そうだな。俺達に任せてくれることよ」

「僕のこと忘れてないかな君たち・・・」

やつべ・・・忘れてた。悪い。

「別にいいや。僕は浜島拓斗。めんどりなことは嫌いでね、が武の力でいつも処理している」

「お前の守護霊は？？」

「『リ二つの』と…？」

「指を描かれた頃には小さな女の子がいた。5・6歳だらうか？？」

「『二つは僕の妹でね。脳をめちゃくちゃにされたとき』『二つも殺されたんだ。君たけとはまた違った悪霊にやられたんだ』

そんな奴もいるのか？？

「『二つの悪霊がいるわ。残りのスポットも後一つ。最近強力な悪霊が住み着いたらしいからね。油断できないんだよ』

そつなんだ……。とこうわけでよろしく。

『よろしくね』

『おのれの名前はなんていうんだ？？

「浜島千沙・・・」

千沙ちやんよろしくね。

『よろしくね』

『・・・よろしくお願ひします』

「血口紹介も終わったといふ早速だが・・・討伐に行く

来たか・・・。最後のスポット・・・。

『お兄ちゃん頑張ろうね・・・』

オッケー。新しい刀の力・・・。見せてくれよ『桜一文字』！！

「目的地は蒼陽中央公園だ！！」

『ラジャー！』

蒼陽中央公園？？なんか聞いたことがある名前だな・・・。なんだか懐かしい感じもする。そんなことを考えながら俺は専用の大型車に乗り込み向かった。そこで悲しい戦いが始まる事を知らずに・。

悪靈討伐部隊『ガイア』へ（後書き）

コメント待っています！！

//シムハ～恋した懸念を救へ～本筋の方（繪書モ）

ここは最後の戦いが近づいてゐる。

## //ショット 恋した悪霊を救へ 玄武の力//

俺達を乗せた大型車は公園に向かって走っていた。リーダーが悪霊についての説明をしてくれていた。

「まず対象の悪霊は最近ここに来たらしいね」

「最近死んだ日とか、それとも悪霊に魂を食われたってことですよね。」

「ああ、それに悪霊とは死ぬまきはに抱えている思いによってレベルが変わるんだ」

圭吾が教えてくれた。なるほど、人生に疲れた人はレベルが低いのかな。

「そうなるね、最も思いに関係するのは恋愛関係だつていう結果が出ていた」

拓斗がパソコンの結果を俺に見せながら言つ。確かにそうだった。

「恋愛にはいろんな感情があるからね。白いものもあれば黒いものも・・・」

紗江子が言つ。表情が優れないことからここは恋愛経験者かな??

「私じゃなの。お姉ちゃんがね、いつなつたのは振った彼氏が恨みから悪霊化したことが原因なの」

なんて勝手なやつなんだ。俺はそれによつて悲しい思いをした悪霊

をもう見ていいからそれに関しては頭にきていた。

「説明を続けるけれど、性別は女。まだ若く、高校生ぐらいじゃないかな？？詳しい目撃がないからあいまいだけれど。間違いなくレベルはAだ。皆心してかかつてくれよ」

『了解！』

そして公園に近づくにつれて空気が重くなってきた。相当負の力が強いらしい。

ききこい！！

車が止められ俺達は配置に付く。ゆっくりと公園内に侵入する。人は誰も着ていない。危険警報を発令していたのだつた。

「おっし、俺が先頭で行く」

がつちりとした筋肉男が言つ。メリケンサックに力をこめて進んでいく。どうやらあれに靈氣をこめているらし。

どどどおおおおん！！

いきなり爆発が田の前で起こつた。爆風で俺達は後方に吹き飛ばされ、何とか着地に成功する。田の前には・・・。

「小西・・・さん・・・」

和服姿で変わり果てた姿で立っている小西桜が立っていた。手には漆黒の日本刀。彼女の足元には魂を喰らいまくつてからだから魂の

形として人間の形がくつきりと体中から見えるあの時封印し損ねた鬼がいた。更に子に資産の隣には彼女と同じ石を額に埋め込まれた少女が立っていた。彼女にも見覚えがある。そして思い出がよみがえってきた・・・。

『まつてよ・・・・!』

『あはは、祐りやさ早くーー!』

俺とその女の子がここではしゃいでいる。両親がまだいた頃の記憶。親同士仲が良かつたので俺達も自然と仲が良くなつた。

『今度は向して遊ぼうか』

『うへん、おままじとはーー?..』

俺が何やるか聞いて、その子はおままじひとと叫んだ。その後変えるまで延々とおままじとをやつしていた気がする。そして最後に彼女は行つた。

『うひーじやなぐれ本当にこんな生活できたらいいね』

『僕なんかでいいの?..?』

『祐りやんだからだよ?..祐りやん優しいから

俺はその時顔を真っ赤にしたように見える。

『僕も将来結婚したい』

『それじゃあ約束ね』

女の子がにっこりと笑いながら小指を差し出してきた。俺もさうした。

『約束だね菜月』

思い出した！－あそこでいるのは俺の幼馴染だ！－

「なんでお前がそこにいるんだ！－」

俺の顔色は最高に悪かつたに違いない。だつてそこでいるのはまつたく関係のない高校生なんだぞ。

「あれ？？佑ちゃん？？」

小西さん・・・じゃない・・・神崎千晴が言つ。

「なんでそこに菜月がいるんだ！－答えるおおおおおお！－」

俺はその場で絶叫した。

「あつはははあああつあははは！－それはだね佑ちゃん。飛行機の中で運悪く菜月が魂食われたらしいよ～」

そんな・・・あのときこ・・・？？

「それにあの時近くにいたのは私。すでにあのときから入れ代わりが進んでいたのだよ。あなたを落とすには知り合いがいいと思つてね。この子の君に寄せる気持ちの強さには驚いたさ～」

お前・・・そんなことのために俺の幼馴染を危険な目にあわせたのか??

「なんだかんだいって佑ちゃんが一番危険だからね~。肉体的よりも精神的な部分から崩すのが手取り早いと思ってね~」

そんなことのために菜月を利用したのか!!ふざけるな!!俺はすでに切れていた。しかしかけださなかつてのは家尾後が俺の腕をつかんで首を横に振つてからだ。

「ここでうかつに出るのは危険だ。怒るのはわかる。俺だってそんなことされたらお前と同じになるだろ?。だがジジは冷静になるべきだ」

すまない圭吾。助かつた。

「そんなにかしこまるなよ。俺達は仲間だし、友達だ」

そつ言つて圭吾は笑う。俺も笑い返す。少し余裕ができるようだ。

「悪靈王よ、貴様は一二何をする気なのだ??」

筋肉男が言つ。彼は熊山と呼ばれているらしい。

「貴様らが私の用意した子供たちを殺したのは」

悪靈王の顔が怒りに支配される。

「これがわれわれの仕事だからだ。貴様ら悪には負けない」

「えまはまつはま、これは愉快だ……ビームで私に反抗できるか見届けてやる……」

そう言ひて悪魔王は手を前に出しつ。

「相手をしておやり……菜月……」

ふらふらと前に出るのは感情が欠落した夏樹だった。同じく和服姿に変わつてゐる彼女だがいつたい何の関係があるのだろうか？？すると彼女の手にはじす黒い短剣が握られていた。空中に無数に浮遊しているのだ。こんなのがりか？？

「レベルAだよ」

拓斗が言つ。あれだけ思いオーラ出してんだからそれくらいは強いだろうな。

「いけるの？？幼馴染なんでしょう？？」

紗江子が俺のことを見配してくれたのか話しかけて来てくれた。ああ、確かに躊躇しそうになるが、それじゃあいつを救えないからな・・・。ここは心を鬼にしてぶつた切るしかない。

「全戦闘準備！！」

「準備……」

若く色黒の双子の執事服の男が行つた。兄の祐一と弟の祐二だったかな？？

「突撃いいい！！」

リーダーの声に俺達は駆け出した。

「闇へと誘え・・・闇雨！！」

無数の短剣が空中から降ってきた。そこに。

「ここは僕の出番かな」

眼鏡を上げながら前に出たのは拓斗だった。手を上に突き出し言ひ。

「我と契約し玄武の力・・・われとわれの守りたいと思う人々を守りたまえ・・・出でよ絶対の守護聖獣玄武！！名はボルグ！！」

ずつしいいいいいん！！

大きな何かが現れる音がした。てっきり短剣の雨が刺さったのかた  
思つたが、目の前には・・・。

「でけえ・・・」

巨大な亀の怪物がいたのだ。否よく資料とかで出てくる玄武の姿だ  
った。その玄武が短剣をすべて防いだのだった。そのおかげで俺達  
は全員無事だつた。

「防御と後方支援は僕に任せください」

淡々と言ひ拓斗だがこれほどの防御力があるとは感心してしまつ。

「よし行くぞ！！！」

俺は駆け出した。

//ミシコノヘ 恋した悪靈を救へへ 玄武の力（後書き）

「メント待つてますーー。

ミシショ～恋した悪靈を救え～朱雀の炎と白虎の光（前書き）

いよいよクライマックス。

## //ショーンへ恋した悪霊を救え//朱雀の炎と白虎の光

後方から拓斗の援護で俺達は確実に前進していた。しかし菜月は短剣を構えて切りかかってくる。あの明るいあいつからは考えられないくらい表情。鉤爪で火花を散らせる紗江子。無数に浮遊する短剣が俺達に向かってくる。

「回避……」

一斉に俺達は地面にダイブする。先ほどまで俺達がいたところには無数の短剣が刺さっていた。それもすぐに消えてしまう。しかしそれくらいでは攻撃は止まらない。再び短剣の雨。しかも今度は範囲が広かつた。

「これは回避しきれないぞ……」

『お兄ちゃん……今こそ刀を使うときだよ……』

愛華・・・そうだな。みんなを守るために、愛する人を守るために・・・  
。俺はこの刀を引く。

まばゆい刀が姿を現す。両手でそれを構える。右手からギンの靈氣が伝わり刀に附加される。それと同時に短剣が振ってくる。

「どうすれば・・・」

仲間の1人がつぶやく。『なんときはまうるんだー！俺が前に出ようとしたら圭吾が俺を制して前に出る。

「……は俺に任せてくれ。眠れるお姫様を起<sup>ハ</sup>すのは幼馴染だろ？」

？」

そんな恥ずかしいこといつなよな。ほら見ろ愛華が膨れちまつたじやないか。なんだよそんなに笑うなよな！！

「俺の力を見せてやるよ・・・。我と契約し朱雀。闇を打ち抜く力をわれに与えたまえ。出でよ！！神鳥朱雀！！名をコベル！！」

巨大な朱雀が姿を現した。離れていても熱を感じるほど熱かった。そして圭吾が愛用している拳銃とその朱雀・守護霊のバルドが同化した。現れた新たな武器とは。

「聖矢を放つアーチェリー・・・」

圭吾の右手には大きなアーチェリーがあった。そしてその矢となるものはなんと紅蓮に燃える朱雀の羽だった。

「闇を打ち碎け！！聖炎散矢！！」

無数の短剣と同じく無数の羽がぶつかり合い消滅する。そして更に菜月に向かつて標準を構え。

「そろそろ起きるよな。封闇炎矢！！」

ためられた羽が1つとなり、長い1本の矢となり、放たれる。渾身の1矢だった。

『！』

皆が驚愕した。確かに矢が彼女を貫いた。しかし無表情のままその

矢を引き抜いて捨てたのだ。

そんなバカな・・・。圭吾の渾身の一撃だぞ・・・。菜月にまつたく効かないなんて・・・。

「それなら私が行きます！――」

紗江子が叫び、聖獸を召還するべく詠唱を始める。

「我と契約し白虎。光を照らすべくわれに力を『えたまえ。出でよ！――閃光白虎！――名をシーフ！――』

光り輝く毛並みの白虎が表れた。背中には光の粒子が漂っていた。

「行くぞシーフ！――闇を光で浄化する！――」

咆哮して、背中に紗江子を乗せて駆け出す。俺も来るべき時に向けて靈氣を一転に集中させる。頼むぞ紗江子。

そんな中で短剣の雨が降る。しかしそれを圭吾が次々に打ち落とし、道を作る。流れた剣を拓斗が防御で防ぐ。完璧な役割分担が成されていた。

そしてほかの仲間たちは後からあとから湧いてくる悪霊たちを片っ端からぶつ倒している。少數で多数の悪霊たちを圧倒する力を持つ仲間。本当に心強い。

『お兄ちゃん、みんな頑張ってるね』

ああ、そうだな。だから俺もへまできないんだよなー。これ結構普

レッシャーなんだけど。

『まつたくいつもお兄ちゃんはどこの行つたの？・菜月さんを助けたいんでしょ今は？？』

ああ、そうだよ。俺がしつかりしなきやいけないんだ。俺には仲間がついている。愛華がついている。そして俺の手には相棒が握られている。負ける要素なんてどこにもないんだ。

そんな時ついに紗江子が菜月の元に到着した。

「淨化されなさい！光爪斬闇！」

光に包まれた紗江子の鍵爪。あれはシーフから出ていた粒子のようだつた。爪から出た残撃が菜月を切り裂く。それでも無表情の菜月。しかし封印攻撃を立て続けに食らつたためか相当力を失っているようだつた。

「行くんだ佑介！！」

リーダーの声に俺は駆け出した。腰には刀『桜・一文字』があつた。準備は万端。後はこいつを菜月に放てばいい。

「はああああああ！」

俺は跳躍した。そして鞘から出した刀を上段に構えて叫ぶ。

「銀龍の咆哮！」

刀からは銀色の靈気がまるで龍の方向のように吐き出され、菜月に

ぶつかつた。見る見るどす黒いオーラが浄化されていくのが分かった。そして最後に真っ白な閃光が広がった。

そして気がついたときには俺は夏樹のひざの上で横になっていた。周りには良かったと安堵する『ガイア』の面々となぜだかご機嫌斜めの愛華がいた。

「佑ちゃん、めんね……こんなことになるとは思わなかつたんだ……」

菜月は泣いていた。何もお前が悪いわけじゃないだろ？？気にするなよな。

「それでも私はみんなにひどいことした……。私じゃない私の目から見てたけど、何度もやめてといつても何度もできなかつた……」  
もはや泣いているに等しかつた。どんな言葉も聞き入れないだろう。  
それほど菜月は傷ついていた。だから俺は行動をとつた。その前に  
『ガイア』の面々にアイコンタクトをとると理解したのかその場から離れてくれた。愛華は離れたくないと言い張つていたが紗江子に  
引っ張られていつた。

「佑ちゃん……めんなさい……」

大粒の涙が彼女の頬を伝つていた。菜月をこんなにも傷つけたのは悪靈王のせいだ。しかし俺は悪靈王のことよりもまずはやらなければ行けないことがあつた。決心した俺は菜月を優しく抱きしめた。

「ふえ？」

間抜けな声を出す菜月。恥ずかしいのかばたばた暴れたが、頭を優

しへ撫でると暴れなくなつた。

「気にしなくてもいい。みんなお前を助けたかったんだから。助かつたんだからそれでいいんだよ。誰もかけてないんだから」

「うわあああーん！…やひひゅーん！…」

俺はただただ菜月を抱きしめていた。そんな一時の平和なときを感じていたいと思っていた。しかし裏ではすでに終幕が迫っていた。

## 守護霊たちが消えるとき

俺達は翌日再び大型車に乗つて最後の戦いの部隊に移動していた。ついたところは普通の野原。しかし空は黒い雲に覆われていて今にも闇の世界が光臨しようとしているかのようだつた。

『お兄ちゃん、ここまで来れば後は勝つだけだよ』

ぐつと親指を立てる愛華。そうだな、最後は小西さんを助けるだけだからな。

「みな、覚悟は決まつたな?」ここからは聖獣の力を持つ4人が悪靈王を、ほかのものは悪靈たちを討伐して欲しい。ここまでくれば守護霊たちも力を思う存分震えるだろう」

その言葉に愛華をはじめとする守護霊たちが歓声を上げた。そしてやつが現れた。

「ははは、まつたくわざわざやうれに来たのか??人間どもが

小西さんの声で話すのやめろよな。虫唾が走る。お前なんかに小西さんを渡すわけには行かない。いい加減返してもらつて!!

『そのとおりだぜ佑介。わざわざここを討伐して祝賀会を開こうじゃないか』

ああ、それはいいな。飲めや食えやのじきちゃん騒がだ!!

『まつたくあなたたちには緊張感はないんですか??』

眼鏡をあげながら言つ拓斗。やつこつお前だつて興味心身じやねえか。

「まへはせんこと思つてないぞ」

おへ・へ・シン『レカ?・?・セルね~』。

「うよつとひよつとみんな、それは勝つてから考えればいいことでしょ?・?・みんな戦闘開始してゐるよ」

俺は振り向くと向こうでは群れで迫つてくる悪霊たちを力ずくで倒していく人々が映つた。みんな俺達を信じているんだな。だったら俺達がやる』とほーつだ!!

「」「」「お前を討伐するーーー!」「」「

「あーはいませ、やれるもんないやつてみなーーー!」

そつこつと悪霊王は手をかざして詠唱する。

「今宵我はこの世の王となる。我にひれ伏せ靈たちよ。我的血となり肉となれーーー!」

俺は次の瞬間愕然としたね。次々と飛び出してきた闇に愛華がつきましたんだ。愛華だけじゃない、ほかのやつの守護霊たちがみんな捕まつっていた。必死にはがしにかかるもみんな苦戦していた。

『お兄ちやんーーー!』

「愛華……」

俺は必死に手を伸ばすも届かなかつた。お兄ちゃんと何度も助けを求める愛華。俺は跳躍する。

「うおおおおおおお……」

俺は愛華をつかむ闇を切り裂いた……。しかし切れなかつた……。跳ね返されたのだ。

「なんで……？」

「ふはははは、貴様も分からつ、我と貴様では靈圧の強さが違つのだ……そんな軟弱な靈圧で我を倒さうなどとは滑稽だ」

笑い飛ばす悪靈王を無視して更に跳躍する。愛華をつかむ闇を斬るために……

「はああああああ……」

俺はかつてないほどの靈氣を刀に付加させた。ただ愛華を助けたいと思つたから。俺の右腕からは鮮血がほとぶついた。

『お兄ちやん……』

自由な片手を命じてぱいに伸ばしていく。俺は闇を斬りつけながら愛華に手を伸ばす。今度こそ届いた。

ぶじゅうひゅうひゅうひゅう……

『ああああああつああああ！』

鮮血ではないきらめくものが愛華の失われた腕から出ていた。悲鳴を上げながら愛華は闇に飲まれていった。俺は呆然と見ながら地面に叩きつけられた。あまりのことに着地を忘れていたのだ。それにまったく闇を切れなかつた・・・俺にはある文字が浮かんだ・・・。

「終わりだ・・・」

ぼそりとつぶやいた。とたんに俺の体は動かなくなつた。体が思い・・・それに・・・眠い・・・みんなが何か叫んでいるのは聞こえるが・・・もういいんだ。俺はそうと目を閉じた。そしてこのとき、世界中から守護霊が消滅した。人々は生きる意志を失い、悪霊の道へと足を踏み入れる・・・。

守護霊たちが消えるとき（後書き）

「メント待つてます！！」

## 目覚める龍の力へ放て！！魂の咆哮へ

俺神崎佑介はふわふわとした無重力間を感じていた。どうやら俺は死んだようだ。

俺は真っ白な空間をただただ歩いていた。そうすると映像が見えた。

「みんな・・・」

それは悪靈王に守護靈を奪われながらも聖獸を操り戦闘を繰り返す仲間たちがいた。

吹き飛ばされる青年がいた・・・。

「圭吾・・・」

血を吐き出す少年がいた・・・。

「拓斗・・・」

血でにじむ傷口を押さえている少女がいた・・・。

「紗江子・・・」

みんな戦っている。向こう側では人間と悪靈が戦っている。

「生徒会長・・・花田さん・・・それに松本さんまで」

かつての生徒会討手メンバーが来ていた。しかし守護靈を奪われ、

押されてくる感は否めない。

「輝弥・・・美野里・・・」

かつて旅行先で共闘した仲間も来ていた。

「みんな戦っているのに俺だけ勝手にあきらめた?/?」

俺は強く手を握った。

「痛いな・・・」

爪で傷ができたのか血が出ていた。

「こななものでまだ俺は生きているってことになるのかな?/?」

『君はまだやることがあるのでは?/?』

誰だ?/?

『君の先祖とでも言おうか。桜・一文字に宿つた私の記憶の世界に君は来ている』

なぜ?/?俺はあの時確かに死んだはずだが・・・。

『君は確かにあきらめた。そして魂を閉ざした』

魂を・・・閉ざした?/?

『昔の私と同じだ・・・。やはり君は私と同じ道を歩むのだな』

血がつながってるから？？

『それもあるだろ？し、君と私は似ているからな』

「そうか？？あんたのほうが俺より強いと思つが・・・。

『人の強さとは一定ではないのだよ』

『一 定 で は な い ？ ？』

『人は誰かを守りたいと本気で思つたときに強くなれる』

でもあの時は闇を切れなかつたぞ？？

『それは・・・』

『おい！…どこへ行くんだ！…まだ話の途中じゃねえか！…

『あなたの本当に守りたいのは誰ですか？？神崎佑介我が子孫よ

そいつ言つて再び白い光が放たれた。俺はそこで目を覚ました。

「これは・・・」

俺が目覚めてから最初に見たのは悪霊たちに追い詰められた仲間たちだった。すでに倒れている仲間もいる。そんな状態で俺がやるべきことはたつた一つだった。

「我と契約し青龍よ、我が友を守る力を、我が愛するものを守る力

をわれに』『えたまえ……出でよ……白銀の龍……名をギン……』

詠唱と同時にギンが現れた。

『我が主よ、ついにともに戦つときが来た』

「もはや予断は許されない……まずはみんなを助ける……」

『良かうひー！主に我の力を預けた！』

「うおおおおおおおおー！」

刀とギンが同化した。柄の周りには龍の姿が刻まれていた。桜舞う  
空に龍が泳いでいるかのようだ。

「はああああつああああー！」

俺は渾身の力を込める。靈気が付加される。

「悪を討伐せよ……龍の舞……」

とたんに体が軽くなつたね。俺は走つて悪霊の群れに突っ込んで片  
つ端から切りまくつた。次々に衝天していく悪霊。氣を失つたまま  
になる人間。どうやら仲間たちはうまく脱出したらしい。

俺はすぐにあいつの元に走つた。すでにやつは何かの儀式を始めて  
いた。

「いい加減にしろ……。お前の野望はここに費えるんだ」

「ひやはは、それないと云つておいつ。我はすでに莫大な靈氣

を内蔵している。貴様なんぞが勝てるわけがない」

そのとき大きな地震が起きた。地面が割れそこからは巨大な鬼が現れた。あの時奪われたときのよりもまた巨大化していた。どうやら悪靈王が奪つた靈氣はすべて鬼に食わしたみたいだな。

「そんなに育ててどうするつもりだ？？」

「IJの子を使つて世界の人々を恐怖のどん底に呪める。そしてあきらめたものから魂を提供してもらひのセ」

「まったくでかい」と驚いたもんだな

「やる」とせやはつでかい」とではないとな

「しかしあつてもそんな」とやうつとして止められたんだろう？？

「昔のこととはまったく興味はないが。あやつのように貴様は強くな 때문이다。それほど危険視しないのだよ。先ほどだつて私の力にひれ伏したではないか」

「け！…あの時はあの時だよ。今は違つ！…俺は全力でテメエを討伐し！…小西さんを助ける…」

俺は刀を鞘から出した。そして吼える。

「ヒーラー！…龍の咆哮！…」

ギンを召還した。そしてギンの口からは銀色の光が一線となつて鬼に直撃した。

「おおおおおおおおーー。」

鬼の体を次々に浄化していく。

「どうなっているのだーーなぜこの子が消えるのだーー。」

あわててこいるのは悪霊王。かつて鬼を討伐できずに封印にじごまつたのはこれがなかったかららしい。そんなことをさつき聞いた。

「これで終わりだ悪霊王ーー。」

そして俺はかつてない封印攻撃を放つ。

「銀龍封悪斬ーー！」

俺は軽く空間を飛んだ感じがした。気づいたときにはすでに鬼と悪霊王の反対側にいたのだから。鬼の腹には五望星が刻まれ底から光が漏れたかと思ったら真っ白な粒子と化した。

そして俺は悪霊王と対峙することとなつた。

目覚める龍の力へ放て！！魂の咆哮へ（後書き）

コメント待っています！！

## 対峙へ巡る輪廻

「はああああああーー！」

「おのれええええーー！」

俺と悪靈王の刀がぶつかり合い、火花が散る。相変わらずの速さと強さを突きつけて来る悪靈王。しかし、徐々にギンの力を解放する俺も何とかついていく。

「！」の人間ふぜえがああああーー！」

切れる悪靈王。刀からはじす黒いオーラが放たれる。俺はそれを正の靈氣で切り裂く。しかし相手はこんなことでは潰れない。次々と闇の中から悪靈たちを呼び寄せる。このままじや、邪魔になつて切り込めない。

『我が主、我を使えーー！』

ギン・・・よし行くぞーー！

「ぐりごり尽くせーー！聖獸尽くせーー！」

ギンが刀から召還され、悪靈たちを食らっていく。道ができたーー！

「食らえーー！」

正の靈圧を斬撃波として飛ばす。それをオーラで防ぐ悪靈王。まったく隙がない。

「ほれほれ、どうした??先ほどの威勢はどこに行つたのだ??」

俺を挑発しようつてか？？

「今からやめてはいけないよ...」

再びギンと同化させた刀を叩きつける。ガギン！…と大きな音が響く。

お互いが勢いで後方へ飛ぶ。あたりの木々はなぎ倒され、草は枯れ果て、土はえぐられ、まともな足場がほとんどなかつた。

「そろそろじゅあいといつたところか・・・」

にやりと笑う悪靈王。一体何をたくらんでやがる。

「」の世を統治するものとなる我に従う僕よ！今ここに現れん！

突如として黒い空に渦が起こつた。なんだか嫌な感じがする。

۱۰

俺が見たものは・・・真っ黒い龍だつた。

「我が僕黒龍・・・かつての戦いはここで終わつたのだ。しかし貴様には力はない。ここで輪廻を終わらせる!—」

黒龍が口を開く。俺も負けじと刀に靈気を集める。

「黒咆哮！！」

龍の口から負の靈氣が吐き出された。そして俺も一気に刀を振るひ。「銀龍の咆哮……」ギンを召還し、その口から銀色の正の靈氣が吐き出されぶつかり合う。

力と力のぶつかり合い。そして黒と白の閃光がほとばしる。

「く・・・どうなったんだ？？」

俺はしばらしてから皿を覚ました。そして見た光景は……。

「ギン・・・」

体の半分を持つていかれたギンの姿だった。もちろん黒龍も大きなダメージを追っていたがギンよりは軽かつた。

『我が主・・・。主だけではこいつには勝てん』

息もたえだえのギンが話す。お前はいったん刀にもどれ。回復せらる。

『ここはかつて戦ったときよりも力を増している。あの時だったから今で倒すことはできただろう』

そして空を見上げて俺は絶句する。

「何だつてこんなとおり……」

無数の悪靈たちの集団が向かってきていった。

「はーはーはーはー、この世は我のものーー存分に喰らいつくせーー。  
我に従つむのたちよーーー！」

悪靈王・・・貴様・・・。

『やるしかないぞ我が主・・・』

やるって何をだ??

『我ら四聖獸を使った最大封印攻撃・・・その名を四聖封陣・・・』

対峙へ巡る輪廻へ（後書き）

コメント待つてます！！

ファイナル!!シショーンへ囚虜封鎖して魔王を討伐せよ～（前書き）

最後の戦い・・・。

## ファイナルミッションへ四聖封印にて魔王を討伐せよ

最大封印攻撃・・・。そして後ろからは最後の戦いに終止符を打つための役者たちがやつてきた。

「佑介・・・俺もユベルから聞いた・・・やるんだろう?俺達の連携攻撃!」

圭吾が走ってきた。体中が傷だらけだ。俺が寝ている間に戦つていたんだもんな。

「すまない・・・俺が勝手にあきらめちまってたから

バゴッ!!

俺は殴られた。

「いてえ・・・」

「痛いだらうな・・・」

俺は頬を押さえながら見上げた。そこには怒っているようだ。うれしそうな顔をした圭吾がいた。

「俺達はお前が寝ているときも戦っていた。俺達はあきらめなかつた

そうだな・・・だからそんなにも傷だらけだもんな・・・。

「それに俺達はもう一度お前が立ち上がるのを期待していた

え？？

「お前だったら……きっと立ち上がってくれるだろ？」「…………生徒会長さんたちが言っていたんだ。それにキザな男やかわいい女の子もそんなことを言つてたぞ」

生徒会長……輝弥……美野里……。

「殴つたのは勝手にあきらめたからだ。謝らないからな

ああ、別にいいさ。俺の責任だからな。

「まつたくあなたには失望しましたよ……佑介さん」

拓斗……。

「しかしやう言いつつも戻つてくるとはまつたくあなたは何者ですか？」

眼鏡をあげながら聞いてくる拓斗。俺はただの討手さ。

「それでは準備にかかりましょ。長引けば悪霊が増えてしまいますからね」

そうだな、始めるか。

「佑介くん……」

紗江子……。

「圭吾くんが殴つてくれたから私は殴らないけど言わせて・・・」

・・・

「バカーーー！」

そういうわれて当然だな。「ごめん。

「でも・・・お帰りなさい」

・・・ただいま。

俺は立ち上ると刀を出した。皆もそれぞれ武器を出していった。

「やり方はわかりますね？？？」

癖なのだろう、拓斗がまた眼鏡をあげながら聞く。

ああ、みんな聖獣から聞いてるからな。圭吾や紗江子も同じだった。

「では、それぞれの持ち場に行つてください。チャンスは一度きり」

俺達が走り出そうとしたら。

「君たち・・・」

リーダーだった。

「悪霊たちはぼくたちでなんともなります。君たちの邪魔をさせ

なこよつ食に止めますから君たちに世界を託します

分かつてますよ。やがてお願いします。

「佑介くん・・・」

生徒会長??

「桜ちやんをよみじくね」

分かつてますよ・・・またみんなで生徒会しまじゅう。

俺達は走った。世界を守るために。

悪靈王はすでに高みの見物状態だった。俺達はそれを確認しつつ東西南北についた。

「一体人間どもはいまさらになつて何をしようかが集まつてもぐずの塊にしかならないといつのに」

悪靈王は高笑い。しかし俺達は動じない。見てる・・・こまからお前がぐず呼ばわりした人間があつと驚くことをしてやるぜ。

「――出でよ――青龍（朱雀・白虎・玄武）――」「

俺達の隣には聖獸が現れた。

いくぞギン・・・最後の戦いだ。

『我は主とともに生きる・・・』

行くぞみんな！！

「人の心の闇より生まれ  
圭吾が詠唱を始める。朱雀の姿が赤い球体に変わる。

「人の心を食らひつもの」

拓斗が詠唱を始める。玄武の姿が緑の球体に変わる。

「陰と陽との調和に元に」

紗江子が詠唱を始める。白虎の姿が白い球体に変わる。

「我らの手にて無に返す」

俺が詠唱を始める。ギン・・・青龍の姿が青い球体に変わる。

「これはなんだ??」

悪靈王が焦つている。球体たちから出た糸状の閃光がそれぞれの球体を丸くつなぎ。円陣を描く。そして最後の詠唱を叫ぶ！！

「――「悪靈！――滅すべし――」――」

円陣がいきなり上空へ一気に上がり、悪靈王をその中に置く。

「何だこれは！――動けぬ！――」

刀を振るも浄化のスピードが速いため負の靈氣は出てこない。

「チクショウ！－ぐずの集まりのくせに－！」

お前はそんなぐずの集まりに負けるんだ！！4体の聖獣が悪霊王を貫く。4色の光が混ざり合い、闇を浄化していく。

「四聖封陣！」

「二」がああああああつああーー！」

悪靈王の最後の悲鳴が響き渡る。闇が浄化される。それを覆つていた闇もまた晴れ渡る。そして小西さんの隣にはどす黒い球体が浮遊していた。

「あれが本体だ！！」

リーダーが叫ぶ。

「佑介行くんだ！！」

吉吾が叫ぶ。

「行つてくださいよ」

拓斗がいう。

「お願いね」

紗江子が言つ。

『行くか、我が主よ』

ああ、行こうぜギン・・・。あいつを討伐しに――！――

「あのれ～人間どもめ――長年の願いはもうすぐそこだというのこ――！」

「お前には何年かかっても無理だうぜ」

俺は駆け出す。

「！」いやくな～！――先祖同様に我の邪魔をしようって――！」

「そういうお前だつて先祖同様に思い人に手を出しあがつて――！――ならば貴様を殺して、この世界を我のものに――！」

「それはさせない――！」

俺は刀を腰の鞘に納めて跳躍した。皆の思いを力に変えて・・・。思い人を助けたいと思う気持ちを力に変えて・・・。

『あつはつは、いまこそ新の力を解放するときです』

清明・・・。来てたのか？？

『私は幽霊ですよ？？どこへでも行けますつて』

ならば見ていろ――俺が先祖と同じ運命を歩まないとこつこと――

『拝見させていただきます』

「しねーー！」

悪靈王が突っ込んできた。そして俺は拔刀を開始する。あの時初めて刀を手にしたときから練習してきた拔刀だ。

「咲き乱れ、宙を舞え！－開桜・龍の舞！－」

どこからか桜が現れる・・・。俺はその中をただ神速で駆け抜ける。そして・・・。

「はあああああつああ！」

拔刀！！

俺は悪靈王の後ろにいた。空からはなぜだか季節はずれの桜が降ってきた。

「・・・この世はままならぬな

「あなたはもつとましな生き方をしな・・・。来世でな」

「ようやく昇天できそうだ・・・」

そして最後に聞いたのは。

「ありがとう」

まさかの悪靈王からの言葉だった。やつは笑顔を俺に見せながら消えていった。どうやら昇天したようだ。以降からはみんなが走って

きた。

「やつたな佑介」

圭吾が開口一番。

ああ、まつたくもつて疲れたよ。

『おひこちやーん！』

俺はいきなり現れた愛華に抱きつかれた。なんでお前がいるんだ？？

『なんだか悪靈王がいなくなつたらいつの間にかここにいたんだよ』

まつたくもつて意味が分からぬ。

「ほかの悪靈たちも悪靈王がいなくなつたことで消滅しました。まあ、まだどこか出合つとは思ひますけどね」

拓斗・・・ははは、こまはゆくつ休みたいよ。

「やすが佑介くん！！先祖同様にやつてくれたね！！」

お前は元気そうだな紗江子。

『あつはつは、やすがの一言に及きますよ佑介くん』

清明・・・皆突然現れた清明にびつくりしていた。

『あなたは魂を消費する』となく、靈氣のみでやつを倒しました。

それも皆の力を合わせたからでしょうな『

それは否定しない。みんながいてくれたから俺は最後に決められたんだ。だから俺が言うことは。

「みんなありがとう」

その日、世界に平和が戻った。

ファイナル!! ションへ 四聖封印して 悪魔王を討伐せよ～（後書き）

次回最終回ーー！

コメント待つてますーー！

## 「ナニワの世界を（繪畫）」

最終回。

今まで呼んでくれた姫さんに感謝しますーー。  
どうもありがとう、アーラー小姐ーー。

「今日の出動先はどこですか？？神崎リーダー（・・・）」

「圭吾か。まだ成り立てだからリーダーって言われてもピンと来ないな」

「あの人がなくなつてからもう5年が経つのか？？」

「ああ、俺に色々と教えてくれたからな

俺と圭吾はリーダー室を出た。

作戦会議室に行くとそこにはかつての・・・否今の仲間たちが待つていた。

「リーダー遅いよ」

すまないな紗江子、ちょっと感慨にふけっていたんだ。

「まったく俺らのリーダーはのんびり屋だな」

輝弥・・・相変わらずだな。

「そんなことよりも今日のポイントはどこなんですか？？」

美野里・・・そうだな。

「今日は北に3キロ行ったところの廃ビル。そこに面白半分で行つ

た高校生がまだ戻つてないみたい」「

「やそぞ祖そならはやくこつてあげなきやいけませんよ」

「ありがとうございます。生徒会長……じゃなくて深夏さん。慌てすぎですよ花田さん。

「閉められてから相当年月がたつてるので、予想としてレベルAでしううね」

相変わらず情報処理が早いな拓斗。

「それじゃあ行こうか佑介」

そうだな桜。

俺達は専用の大型車に乗つてポイントの廃ビルに来ていた。

「なあ桜・・・、こんなときこいつのもなんだけどさ・・・」

俺達は現在交際5年目だった。当時は色々あつたな。何とか桜に認められようと頑張つたし、認められた次は愛華のご機嫌取り。まったくもつて大変だった。そんな愛華は今では許してくれている。

「そろそろ一緒にすまないか??それにお前の親にも挨拶行きたいし

桜は最初は真っ赤になつて何もいわなかつたが。

「そうだね、帰つたら連絡とつて見るよ

それは助かる。それじゃあまざわ・・・。

「UJの廃ビルの悪霊討伐でも行きますか！！」

これからも俺達の戦いは続いていく。それでも負けはしない・・・  
大切な人を守るために・・・。

(完)

『KANAKI』の世界を（後書き）

いかがでしたでしょうか??

最後に「メントなどをいただけすると今後の執筆の励みとなります。  
これからも泉海斗をよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8869m/>

守護霊（ガーディアン）と討手（ハンター）

2010年10月10日18時23分発行